

小源 いま逃げ出した奴は、盗賊引窓與兵衛が同類、遠州九助といふ奴。見失つたか、残念な。

捕手 モシく、あれに後向きになつてゐる奴は、九助ではござりませぬか。

小源 べら坊め、あれは孔雀茶屋の看板の人形、久しいものだ。知らぬか。

捕手 イヤモウ、正の人間のやうでござりますゆゑ。

小源 馬鹿を云はずと、いま一詮議。續け。

ト小源次、捕り手を連れ、下座へ入る。九助、跡を見送り

九助 ひやいな事であつた。

ト云ふうち、奥にてバタ／＼とするゆゑ、また人形のやうになつてゐる。門の内より九平次、走り出て来て

九平 先刻團右衛門さまから寄越したこの手紙、封も切らぬうち、あの十右衛門めが見破つて、側へ引

附けて置くは、慥かに詮議をする工面。ア、どうぞコレ少つとのうち

ト九助を見て

オ、幸ひ。あの人形の脊負つてゐる風呂敷の中へ。

トまた下座にてバタ／＼とする。

オイく、いま茶を一杯飲んでゆく。

ト門の方を見い、九助が脊負つてゐる風呂敷の中へ、以前の手紙を入れ 孔雀茶屋の中へ入る。

九助、あたりを見廻し

九助 この間に巖隨寺の中へ。

ト矢張り右の鳴り物にて、九助、門の内へ入る。茶屋の内より九平次出て来り

九平 ヤアく、たつた今まであつた看板の人形は

ト簾の中より紋五郎出て

紋五 モシ、九平次さん、今のを見たか。

九平 エ。

紋五 サア、たしか遠州九助といふ泥坊、お役人に追ひかけられて、人形になつて隠れた様子だが、泥

坊といふが怖さに、小さくなつて見てみました。

ト此うち下座より小源次、捕り手を連れ、出かゝりゐて

小源 すりや、九助は人形になつて隠れてうせたか。

紋五 たしか巖隨寺の門の内へ

小源 逃げ込み居らば

ト行かうとするな

九平 ア、モシ、門の内なら籠の鳥、荒立てすと氣を抜いて。

小源 イカサマ、彼奴も命がけ。

紋五 自棄を起して働いたら

小源 それでは却つて毛を吹いて

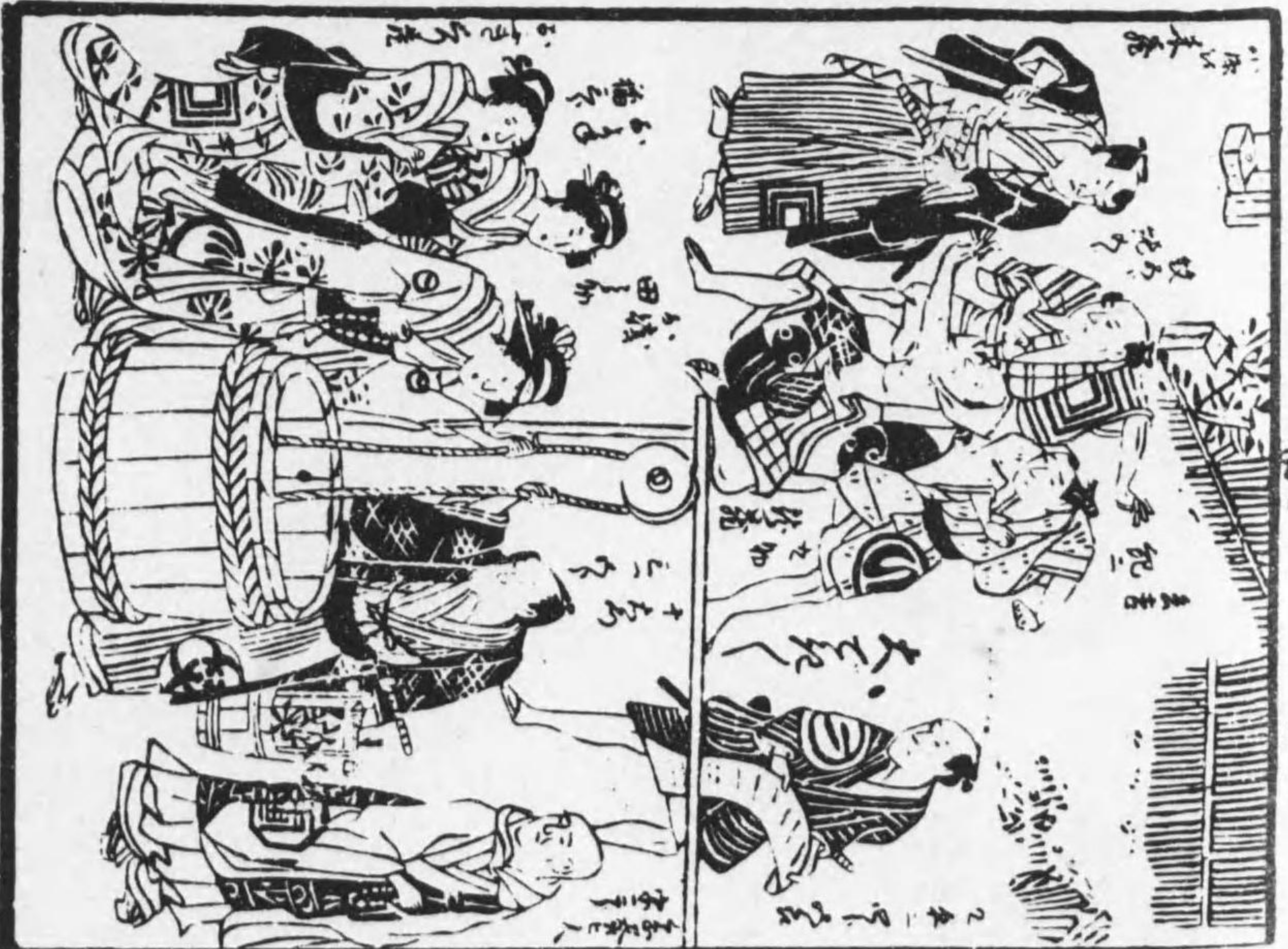
九平 きづかひござりませぬ。この九平次が……モシ、耳をお貸しなされませ。

ト小源次に囁やく。右の鳴り物にて道具廻る。

本舞臺、上の方へ寄せて石の法橋塔、これより下の方まで玉椿の垣根、うしろ淺黄幕、詠らへの通り

この道具にて納まる。

ト唄になり、向うよりお賤、振り袖衣裳、品よき娘にて、水晶の珠數を持ち、お米、おふき、下女にて、櫛の花を持ち、兵吉、丁稚にて、風呂敷包みをお負ひ、附いて出てくる。直ぐに本舞臺へ来る。此うち下座より念譽上人、以前の形、同宿二人附き出て來り



念譽 これはいく、お賤女郎、愚僧檀家へ道寄りござつたゆゑ、先へ罷り歸り、もうかくと相待ち居つた。

しづ お上人さま、今日は御苦勞に存じまする。

よね 申し、お賤さま、あの深川から遠い道をお駕籠にも召しませず、定めしお御足が痛みませう。しづ 何のいなう。遠いお寺へ歩みを運ぶが、矢ッ張り佛様へ御奉公ぢやわいなう。

ふき 我折れ、嫁入り盛りの娘御が、假初めにも後生の爲、今日も今日とて、梅屋敷か芝居へ行くお供ぢやと思ふたに、當の違つたお寺詣りで、精も力も落ちましたわいなア。

兵吉 イヤモウ、江戸へ出てから、淺草々々といふから、草のたんとある所と思ひましたら、甘酒や焼芋、食ふものばつかり。これを思へば、わしが在所の田舎者より、江戸者は餘ッほど意地が汚ない。

ふき 何を。

念譽 時にお賤女郎、爰へござれ。授戒せぬうち、いま一應。

しづ また御意見でござりまするか。

念譽 サア、蔭裏の豆もはじけるといふやうな年配で、男女の道も好ましく思ひさうなところを、養子

聾の文藏どのを、振向いて見る心も無く、たゞ尼になりたいの、出家しようのと云はるゝ由。今日、わざ／＼兄御の徳兵衛どのが、愚僧を呼びに寄越されて、右の述懐。

ふき さうでござります。わたし等なら、取り附いて返事する聾様を、嫌ぢやとは、男冥加に盡きるお賤さま。我まゝ者ぢやと、旦那様も腹立つて、そんなら坊主になと、尼になと、勝手次第にせいと。

よね 思ひ切つて、お住持様をお頼みなされたも、仕様が無さでござりませう。

念譽 それ／＼、あれが勝手にしてやつて下されと、徳兵衛どのゝ云はれたは、妹一人捨てた心。ま一度思案しかへて見る

しづ 心はさら／＼ござりませぬ。少つとも早う、あなたのお弟子に。

兵吉 讀めた。こりやア斯うでござります。聾の男振りが氣に入らず、兵吉になされたいといふ。ふき 何を……そんならどうでも。

しづ 花の吾妻に住みながら、浮世を捨て、深山木の、佛へ立てる心の誓ひは、どうしても破られぬわいの。

念譽 是非に及ばぬ。これも佛縁。

しづ すりや、御得心なされまして

念譽 望みの通り、佛の御弟子。

しづ エ、有り難うござります。

兵吉 ア、惜しいものだ。

念譽 ソレ、同宿ども、何をうつかり。授戒の用意。

同宿 畏りました。

しづ 米も、ふきも、サアおぢや。

ト唄になり、念譽上人先にお賤、皆々附添ひ下座へ入る。双盤にて、三方廻しに道具變る。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、真中に石の井戸、繩釣瓶を下げ、石の龜の甲、傍らに妙法水といふ石碑。上の見切り柳の立ち樹、傍らに觀音堂。下の方まで玉椿の垣。この後、石塔の頭ばかり見せたる卵塔場。下の方、黒幕の脇、墓場の門。眺らへの通り、右の鳴り物にて道具とま

ト筆簾に木魚の入りたる合ひ方になり、下座より十右衛門、墓手桶に櫛の入りたるを提げ、出て來て

あたりを見廻し

十右オ、妙法水といふ石碑がある。爰ぢやく。

ト井戸の側へ寄り、水を汲まうとして

ア、イカサマ、水の流れと人の行く末ほど知れぬものはない。念頃にした、あの與兵衛が盗人で、あまつさへ、この程八町繩手の仕置場で、思はず讀んだ捨て札も、弔らうてくれての事かと、手を廻して首を貫ひうけ、今朝早くに、爰へ弔つてもらつたも、旦那寺へはやらぬ佛。有り難いこの巖隨寺へ弔らうたも、未來はどうぞ……ア、太い氣のある男とも見えなんだが、妙法水を手向けの水で、浮かむやうにさつしやい。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト釣瓶を手繰り、水を汲みかゝる。また右の合ひ方にて、下座よりお賤、櫛を持ち、念譽上人、お米、おふき、手桶を下げ、同宿二人附き出て來り

よね モシ／＼、お上人様、その有り難い井戸は、これでござりまするか。

ふき なんの有り難いといふて、水が甘露でもあるまい。爰にあれば、矢ッ張り墓の井戸。

念譽 ア、勿體ない。これこそ開山龍女尊、濟度ありし妙法水、佛へ捧ぐる阿伽の水。粗相云はずと

ソレ、お賤女郎。

しづ 形に墨に染めずとも、せめて心に五戒を保ち、お上人様のお剃刀を戴くが、わたしが本望、念譽 それ／＼、五戒を保てば、出家得道いたしたも同然。法名は、貞心尼と附け申さう。しづ 有り難う存じまする。おふき、その阿伽桶をたも。ふき ハイ／＼。

ト手桶を渡す。

よね モシ／＼、斯様な事は、わたし等が役目。それにあなたが、お汲みなされやうとは。

ふき それ／＼、釣瓶繩で手々が荒れませうぞえ。

しづ イヤ／＼、水仕の業も手づからするが、佛様への御奉公。ドレ、汲みあけませうか。

トまた右の合ひ方にて、お賤釣瓶繩へかゝる。此うち十右衛門、前の水にて手桶を濯ぎ、櫛の枯れ葉など取つて水を明け、この時左右より釣瓶繩にかゝり、思はず顔見合す。お賤惘りして

ヤア、お前は

ト手桶を井戸へ取落す。十右衛門は、どうか見たやうなと思案する。

ふき モシ／＼、手桶が落ちましたわいなア。

よね 矢ッ張り汲まじなるとよいのに。

トおふき、井戸を覗き

ふきアレく、うほくと浮いて居ります。お寺に錨は無いかいなア。

ト騒ぐ。

しづ 思ひがけなき作藏さま。

十右 そりや、わしが屋敷に居た時の名。それを知つた娘御。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

しづ それいなア。千葉さまの奥に勤めてゐた

十右 雛次さまと云はしつたのかえ。

しづ それをマア、忘れてからに。

十右 最早七八年あとの事。ハテ、女子の子の成人するは早いもの。とんと見忘れ申した。

ト水を汲む。

しづ してマア、お名も變つた様子。町家で今では

十右 サア、その名は

ト念譽上人を見て思ひ入れ。

念譽 當寺へ、變つた佛を葬むられたお施主。大事なくば、愚僧もお名を

十右 アイヤ、どうで七日々々に參詣いたせば、それまでには、相知れます。

しづ ほんにマア、不思議な御縁と云はうか、嬉しいと云はうか。どうぞマア、今おいでなる所を、米も、ふきも、お聞き申してたもいなう。

ト俄に我が形を見たり、昔を撫でつしてソワ／＼する。念譽上人、不思議な思ひ入れ。

ふき 我折れ、巖隨寺のお上人様より、有り難いお方かして、佛いぢりのあのお子さんが、きつい御信心。

よね どうぞマア、お前さんのお名や、おいでなさる所は

ふき 何といふお寺ぢやえ。

十右 ハ、、、。イヤモウ、程なく日も暮れかゝるに、相手になつては居られぬ。ドレマア、墓へ

詣つて

ト手桶を持ち、行かうとするを

しづ ア、モシ

十右 何ぞ御用でござるかえ。

しづ サア、その川はナ  
ふき 四文一合持つて來や。  
よね 何を阿房らしい。

トお賤こなしあつて

しづ 申し、お前さんはアノ、伊勢物語を御存じでござんすかえ。

十右 ハテ、變つた事をきく娘御。わしども風情が、そんなしやらつくさい事を知らう筈はござらないが、その伊勢物語とやらは、あの吉龍が講釋で聞いて、所々は覚えてるますて。

しづ 昔いなかわたらひしける人の子ども、井の許にゐて遊びける……モシ、お前とわたしと、丁度此やうに。

十右 それは彼の、うない子とやらの文段……男はこの女こそは得めと思ふ。

しづ 女はこの男をと思ひつゝ、親の合はすれどきかでなんありけるを

十右 ア、何とやら。オ、それく……筒井筒、井筒にかけしまろがたけ……たしか、こんな事であつた。

しづ くらべこし、振分け髪もかたすぎぬ、君ならずして誰れかあぐべき。

十右 講釋も矢ッ張り聞き書が下へ落ちるて。

ト下座より以前の寺男駈けて來り

寺男 モシく、たしかお前でござりませう、ちよつとお呼び申してくれと、どこのかお人が待つて居られます。

十右 ナニ、アノわしに。

寺男 サア、今朝吊つた佛のお施主といふから、外ぢやアござりませぬ。

十右 さういふ方なら

ト手桶を下げて行きかゝる。

しづ ア、モシ、まだお話しが

ト伸びあがるを

ふき ア、モシ、井戸へはまりますわいな。

ト抱きとめるうち

十右 おれに逢ひたいとは、誰れぢや知らん。

ト矢張り以前の合ひ方にて、十右衛門、手桶を下げ、寺男附いて下座へ入る。お賤、うつとりして

見送つてゐる。

七一四

よね モシ、あなたは、何をうつとりしておいでなさんすぞいなア。

ふき ア、聞えた。こりや井戸へ落ちた、手桶の事が氣にかゝるのぢやな。

念譽 ア、イヤ、當所は狐狸が多うて、惡戯をしてならぬ。狐狸の障化も、愚僧の珠數先で……  
南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト珠數を出して無性に拜む。

しづ コレ、およね、わしが男持たうと云うたら、兄さんが吐りやせまいかいなう。

よね なんの、その事で氣を揉んでおいでなさんした旦那様、お喜びなされますわいなア。

しづ エ、この髪も、こんな結ばにやよかつたものを。

よね でもお前さん、尼になると

しづ なんの、坊さんは、わしや嫌ひぢやわいなう。

念譽 ヤア、いよく狸の業……南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト珠數を採みかける。

ふき お賤さまが男を持たうと仰しやれば、旦那様のお喜び。いよく聲様を

しづ 持たいでどうせうぞいなう。

念譽 コレ、お賤どの、愚僧を内まで呼んで、佛へ願うて五戒を保ちたいと、云はつしやれたではないか。

しづ どこにそんな事を申しましたぞいな。

念譽 でも、貞心尼と名まで附けて

しづ エ、穢らしい。坊さんの名が附けられるものかいなア。

念譽 どうでも狐の所爲。おのれ、女中に見入るとも、念佛の功力を以て、落さいで置かうか。南無阿

彌陀佛々々々々々々。

ふき 何ぢや知らぬが、めでたいく。

よね ちやつとお歸りなされませいなア。

しづ 今のお方は慥かにお寺に、皆、おぢや。

念譽 おのれ狐め、落ちおれ。ソレ。同宿ども、念佛々々。

よね サア、お出しなされませ。

念同 南無阿彌陀佛々々々々。

七一五



ト矢張り右の合ひ方にて。お賤、イツ〜。念譽上人珠数を採み、責め念佛。皆々心々に下座に入る。ト入相の鐘。只の合ひ方に變り、下の墓所の門より、九助先に、十右衛門出て來り

九助 サテハヤ、段々と頭の事を、御深切さまなお世話、有り難うござりまする。

十右 すりや、いよく貴様が遠州九助といふお人か。

九助 左様でござります。イヤモウ、わたしも泥坊の仲間とお聞きなすつたら、恐ろしいやうにも思はつしやらうが、さうでない事は、頭の氣前でも知れませう。こんな身すぎをするも、生れついた因果。引窓與兵衛と云はれた頭でも、運が盡きれば

十右 コレ。

ト思ひ入れ。

九助 サア、しまはれさした首を、せめて葬むりたいものと、昨日仕置場へ行つて聞けば、祈禱の爲に葬むるとして、所は知らねど、十右衛門さまといふお人が、貰つてござつたとの話し。ハテ、深切なお人もあるものと、頭の内儀に聞きましたら、そりや斯う〜いふ筋のお方と

十右 サア、あのお鶴は、わしが親仁の所に、子供の折は年季奉公。それが縁で、與兵衛とも知る人になり、世話もしたり、又なつたり。

九助 サア、そのお鶴どのも、お目にかゝつて禮も云ひたけれど、亭主の身の上面目なく、それゆゑ、わしに逢つて、よく〜申してくれと、何やかや禮の手紙。

ト懐より狀を二通出し、よく見極めて一本渡す。十右衛門取つて開き

十右 「久々お目も致し申さず候へども、いよく御機嫌よく、さてはこの度、與兵衛こと、お心にかけられ御深切に」

トいろ〜透かし見て

こりやモウ日暮れで、黑白が判らぬ。内へ歸つてとつくりと……して、お鶴は、どこにゐます。

ト手紙を懐へ入れる。

九助 サア。

ト思案して

住所を云はぬもエテの習ひ。悪く思つて下さりますな。

十右 成る程、そんならこれ

ト立上がり、行かうとするを

九助 ア、モシ〜、頭が働き溜めた金、方々へ散つてある噂。お前なぞに、よもや預けもしますま

いが、モシ、あの與兵衛どの、兄、曲り金の仁太といふ奴は、頭に似合はぬ悪い者。念頃にした顔も、彼奴にばかりは知らされませぬぞえ。

十右 ムウ。すりやアノ、曲り金の仁太

九助 心得の爲、云つて置きますぞえ。

十右 深切、忝い。

九助 また其うち。

ト以前の手拭をかむる。此うち下座より小源次先に、紋五郎尻からげ、弓張提灯を袖に隠し、捕り手附添ひ出て来り、九助を透し見て

小源 與兵衛が同類

捕手 捕つた。

ト九助へかゝる。早めたる双盤にて、ちよつと立廻り、十右衛門胸り、皆々を突きつけ、ちやつと觀音堂へ入り、戸を締め隠れるうち、捕り手、九助を引据ゑ

動くな。

九助 ア、モシ、私しはそんなものではござりませぬぞ。

小源 吐かすな、おのれ。引窓が手下、遠州九助。

紋五 ソレ、最前おらが見世の人形になつて、隠れた證據は、かぶせて置いたその手拭。

九助 アノ

小源 ソレ、引ッ縛れ。

捕手 捕つた。

トかゝるを、矢張り双盤にて九助、ボン／＼と突きつけ、一散に墓場の木戸の内へ逃げて入る。皆々跡追うて同じ木戸へ入る。バタ／＼にて下座よりお賤駈けて出るを、兵吉追ひ駆け出て来て、お賤に  
しなだれるを

しづ アレ兵吉、悪い事しやんな。

兵吉 ナニよい事をします。お前が尼になれば思ひ切れど、いま聞けば、聳を取る心にならつしやる位なら、この兵吉、去年の九月、信濃から来て、十年二分の給金で年期に住んだも、お前に惚れて惚れぬいたから。モシ、一升の飯を一日に食はぬ法もあれ、思ひ切られませぬ。幸ひあたりに遠慮もなし、ツイちよつと

ト又しなだれるを突きつけ

しづエ、嫌らしい、穢ない。主に向つて不躰な事しやると、きかぬぞ。

兵吉 なんと云はしつても、爰は嚴隨寺の墓場。慥かにさう云はつしやるだらうと、お寺の臺所で盗んで来たこの出刃庖丁。

ト懐より庖丁を出し

エ、色になるが否なら、わしと一緒に心中して下さりませ。

しづア、コレ、危ないわいなう。

兵吉 お寺の墓場で、一緒に埋められるがわしが願ひ。

しづア、コレ、滅多な事を。

ト此うちおふき出て来て、この中へ入り

ふき コレ、兵吉どの、滅相な、お賤さまを、どうしやる。

兵吉 イヤ、所せん戀が叶はぬから、心中してしまふ。

ふき さうはさ、ぬ。わしが云ふ事きかぬうちは、心中はさせられぬわいの。

兵吉 いまくしい狐め。そこを退かぬか。

ふき イヤ、きかぬ。

ト此うちお賤、觀音堂へ逃げこみ隠れる。兵吉、おふきと争ひ、おふき出刃を取るはずみに兵吉の鼻をそぐ

兵吉 ア、痛い。ふとりひん中。

トわめく。おふき恠りして下座へ逃げて入る。兵吉、鼻くたせりふにて尋ね廻るところへ、バタ／＼にて下座より、九助逃げて出るを、兵吉、お賤と思ひ捕へる。九助立廻りに脾腹を蹴る。兵吉「ウム」と立ちすくみになる。九助キツと思案して、かむつてゐたる手拭を取り、兵吉にかむせ、そこら見廻し、井戸の釣瓶に取りつき、井戸へ下がり隠れる。矢張り双盤、バタ／＼にて、下座より小源次先に紋五郎捕り手附添ひ出て来り、兵吉を見て

小源 遠州九助、爰にうせたか。

捕手 捕つた。

ト繩をかけて縛り上げる。兵吉心づき

兵吉 ハア、こや、ほうするく。

トわめく、紋五郎提灯にて

小源 鼻を摺りこはしたかして、面は血まぶれなれど

紋五 覚えの手拭。

兵吉 フナ〜〜。

小源 昆布巻ぢやあるまいし。

紋五 何を仰しやります。

小源 引立たい。

ト矢張り双盤、兵吉捨ぜりふにて引立てられ、皆々向うへ入る。此うち井戸より九助、繩をたぐり上がりに来て

九助 ても、危ない事であつた……それにしても、先刻門前の孔雀茶屋で、人形になつてゐるうち、後の風呂敷へ押しこんで行つたこの手紙の、宛名の九平次とは、あのお鶴どの、慥か伯父御、これも内へ持つて歸つて

ト出して見て懐へ入れる。此うち下の門より九平次、墓場の盆提灯を灯し、ツカ〜と出て

九平 替へ玉を握らせた遠州九助。その手紙を巻きあけてどうする。

九助 ヤア。

九平 あらぬ物まで盗人根性。取返した上逃がしてやる。マア、その手紙を

ト九助が懐へ手を突きこんで手紙を引出す。立廻りに提灯消えて闇の思ひ入れ。手紙を取落し、九平次探るうち、九助は向うへ入る。時の鐘、よき程に観音堂の中より十右衛門、お賤、じだらくなる形にて、手を引きて出てくる。九平次、十右衛門を九助と思ひ、捕へる立廻りに、十右衛門が懐中の以前の手紙を引出し、これも取落し、互ひに探り合ひ尋れる。この中へお賤、慥へながら入り、ト十右衛門は九平次の一通、九平次は十右衛門の一通を、違へて取上げ、うなづく途端、チャンと双盤の頭を打込む。お賤、慥、下に居て慥ふ。九平次、十右衛門へかゝるを取つて投げのける。お賤、十右衛門へ取りつくをキツと引しめる。九平次ホツと思ひ入れ。右の双盤にてよろしく拍子

幕

三幕目

仲町の場

役名——遠山甚三郎。平野町の徳兵衛。菜賣り、曲り金の仁太。木屋文藏。澤屋金兵衛。中間油の九平次。長谷部運太夫。植木屋定六、太神樂、紋五郎。同、三次。同、權八。侍ひ、里之進船頭、市川屋の三。天満屋女房、お北、天満屋のお初。同、お宮。藝者、お糸。同、梅吉。仲居

お倉。同、おさの。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け左右塗り骨障子、真中打ぬき中庭の體。石燈籠、植込み。上方、鼠壁の屋體。長持に仕舞ひ札貼つてあり、天満屋といふ掛け行燈。すべて仲町天満屋裏つづき庭、路地入り口の體。幕の内よりお北、着流し、女房の形にて、箱火鉢にあたり、其のんでゐる。梅吉、抱への藝者、病人の拵へにて、搔卷を着て、七輪に薬を煎じながら、柳樽の本を二三冊置きながら見てゐる。二重屋體におさの、お倉、着流し、前垂れにて、肌をぬぎ、鏡臺を二つ並べ、身じまひしてゐる。下の方に紋五郎、着流し、一本差し、籠毬を頭へのせ、曲事。三次、着流し、一本差しにて笛を吹き、權八、布子、股引にて、挟み箱の上にて太鼓を叩きゐる。仕出しの子供これを見てゐる。深川騒ぎ、曲撥にて幕明く。

皆々 よい〜。

ト荷擔ぎ、太鼓を持つてゆく。紋五郎、太鼓を打つて納まる。

紋五 おめでたうござります。

三次 跡はお龜の栗餅

權八 お齒黒獅子か劍の舞。

紋五 劍の舞より、お客で急がしくつて、女中衆のとんく舞が見たい。

三人 おかみさま後ほど。

ト通り神樂になり、太鼓を叩き、三人に仕出し附いて向うへ入る。

きた 今日(けふ)は定(さだ)さんの知(し)らせで、珍(めづ)らしいお大名(だいみや)のお客(きやく)。それで大抵(たいてい)忙(いそ)がしい事(こと)ぢやない。お倉(くら)も、お

さのも、もうしまひかや。

二人 もうようござります。

きた 料理番(れうりばん)どんの手廻(てまわ)しはよいかの。

ト奥(おく)にて手(て)を叩(たた)く。

アレ、お手(て)が鳴(な)るよ。

女(め)皆(みな) アイ、い、い、い。

くら 梅吉(うめきち)さん、大分(だいぶ)顔(かほ)つきがよいね。

梅吉(うめきち) この暖(あたた)かで大(おほ)きにいゝわえ。

さの その木(き)は、新板(しんぱん)の敵討(かたきうち)か、洒落本(しゃれほん)かえ。

ト云ひく鏡臺を片附ける。

梅吉 イエく、こりやア本屋さんに借りた、川柳とやらの匂ぢやわいな。  
きた ありや柳樽といふて、大抵面白いわえ。

梅吉 モシ、おかみ様

ト柳樽を見て

爰にあるのがな「よいしめりなど、時平も初手は云ひ」。こりや天神記の時平の事かえ。

きた 天神様が、雷さんになつて、時平を引裂いたれど、初手のうちは時平も、よいしめりなど云うてゐたらうわな。

さの こりやアようござります。

トお北、本を見て

きた 「人は武士、なぜ傾城に嫌がられ」

ト云はうとして口を押へ

これはしたり、お大名のお客さんがお入りぢやのに、わたしとした事が。ホ、ホ、ホ、ホ。

ト笑ひく、其のんでゐる。曲撥、流行り唄になり、向うより金兵衛、着附、羽織にて、三、船頭に

て火繩箱を持ち、文藏、着附、羽織にて、三を捻ぢあげ出て来て

三 コレ、文藏さま、どうさつしやるのたく。

文藏 どうといつて、なんでおれが事を、勇みだの、傳法だのと云つたのだ。

三 それでも此ごろは、勇みなさるといふ事だから。

文藏 兄貴へ聞えても悪い。そんな事を云やるな。

ト突き放し

澤屋の番頭の金兵衛どの、先刻から呼ぶが、聞えないのかえ。

金兵 ナニ聲ではなし、澤屋の金兵衛、澤山に聞えてゐるよ。

三 この澤屋の金兵衛さまは、女郎買ひといふと、夢中になつて大急ぎサ。

文藏 そんなら仲町の女郎の中でも

三 誰れといつてきまらねえ情なし様サ。

文藏 おきやアがれ。

金兵 文藏さま、さうして用でもあるのかえ。

文藏 是非こなさんに逢はうと思つて出かけたが、好い所で逢ひました。外の事でもない、正月中、

兩國で、遠山の殿様の御流浪。外ならぬお出入りの事ゆゑ、御歸參について、質請けしてあげた四方出の香爐。その時の二百兩の金はどうなつたか、それが聞きたさに呼んだのサ。

金兵 それが用かえ。それは質屋の事なれば、金銀出入り、丁度よい所で逢うたとはいふものゝ、その金は、今日大口の質があつて、靈岸島まで行つたが、相談が出来ずに持つて歸つて、この金がそれか知らぬて。

文藏 エ、。

ト思ひ入れあつて

そんならアノ、その時の二百兩を、いま持つて居さつしやるか。アノ四つ石の極印の金兵 イヤ、此方の見世の極印は、まだ打たぬか知らぬて。

文藏 なにサ、その極印ぢやアない、此方の尋ねる

ト云はうとして思ひ入れあつて

その金ゆゑにこそ、この頃中から、おれが心の亂騒ぎ。何の事も思はないで、小焦れまぎれに喧嘩口論。勇みと云はれるも知らなんだが、エ、コレ、どうぞその金をちよつと

金兵 ハテ、質草さへ寄越さつしやれば、この金ばかりではない、澤屋の内に澤山な金。外にいくらも

あるから、氣遣ひさつしやるな。

文藏 ハテ、外の金ぢやアないよ。

ト本舞臺へ来る。お北皆々、金兵衛の側へ来て

きた これは金兵衛さん

さの三さん、鳴子も曳かずに裏からかえ。

三 太神樂と入替つて入つたのサ。

きた あなた、ようお出でなさんした。

さの 金兵衛さん、ぬしはお初かえ。

ト梅吉、文藏を見て

梅吉 ぬしは尾花屋で御一座申したがな。

金兵 平野町の徳兵衛さんの弟御で、文藏さんといふお方サ。

きた そんならお前さんは、前々からお馴染みの、徳兵衛さんの弟さんかえ。

文藏 さやうサ。

きた お倉、どうせうの。晝から徳兵衛さんが、二階へお出でさんしたによつて、それではお差合ひが

文藏 何と云はつしやる。兄貴が此方の内へ遊びに来てか。

きたアイ。

文藏 そんな事もあらうが、兄貴はこの頃眼病氣で、日が暮れると、とんと鳥目。きたイ、エ、逆上がして、目が少しかすむとばかり云ひなさんした。

文藏 そりやア色里だけ、鳥目と云つては色氣が無いから、隠してだらう。金兵衛どのに内證で、用があつて来たれば、必ず兄貴へ沙汰無しに。

きた そりや合點でござんす。

文藏 そんなら金兵衛どの、いよく今の金の事は

金兵 八テしつこい。いくらなりとも、金はあるといふに。

文藏 小ぢれつたい。さうぢやアないわな。

女皆 ハテ、お焦れなさんせずと、マアお二階へ。

文藏 サア、行きやせう。

ト騒ぎになり、皆々奥へ入る。チョン／＼にて、上より格子の道具を引出す。

本舞臺、三間の間、向う一面の格子、直中に入り口、高ざし暖簾、梅鉢の紋、天満屋といふ掛け行燈。仲町裏のか／＼りになる。道具とまる。

ト直ぐに曲撥、行列三重になり、向うより十六、又内、紺看板の奴にて、對の挟み箱。雉平、槍持ち黒絹羽織の先徒士四人、二行に並び、陸尺四人、乗り物を擔ぎ、乗り物に甚三郎、大殿の着附、麻上下にて乗つてゐる。里之進、運太夫、袴羽織、股立ちにて、左右の駕籠脇に付きそひ、九平次、紺看板、幅廣帯にて草履取り。藤内、袋入りの長柄を持ち、門平、曳馬の口を取り、出て来て、揚げ幕の際まで並ぶ。入り口よりおさの、お倉、出でくる。よき程に乗り物より甚三郎覗く。運太夫、乗り物の側へ行き、何か承るこなしあつて

運夫 お乗り物、暫く。

皆々 ハア、。

ト乗り物を立て、供廻り平伏する。運太夫、乗り物を明ける。九平次、草履を直す。運太夫、合點のゆかぬこなしにて

運太 憚りながら今日は、御家督の先例にて、富ヶ岡八幡へ御参詣。遠山家の重寶に御祈念あつて、直さまお歸りと思ひの外、只今お乗り物を立てられましたは、お小用でも遊ばされますかな。



甚三 今日八幡へ参詣いたし、重器の香爐に祈念相濟む上は、その次手として、當遊所の妓婦に、手前志す者あれば、家督の上は誰れ憚る事もなく、本供での遊所通ひ。

運太 ヤア〜〜。

ト膽をつぶす。

くら そんなら昨夜から、植木屋の定さんが、來なさんしてのお噂。さのお大名のお入りといふ事は聞いてゐるたが、よもや此やうに、御本供でのお遊びとは存じませなんだ。

ト甚三郎そこら見て

甚三 この酒店に相違ないか。

倉さ サア、入らつしやりませ。

ト騒ぎになり、おさの先に立ち、甚三郎、運太夫、里之進、九平次附いて入り口より入る。

又四 お供待ちの間、爰にも居られまい。

十六 八幡山へでも行つて素見さうか。

准平 お後供と一緒に、一の鳥居まで行つて待たざアなるまい。

供皆 サア、行くべいく。

ト曲撥、流行り唄になり、供廻り皆々向うへ引返す。此うち向うよりお衆、藝者。お初、女郎の拵らへ。男に三味線箱と襦袢の包みを持たせ、出て來て、供廻りと摺れ違ふ。

門平 い、お供揃ひだぞえ。

藤内 いづれ〜、腰は柳の間の、大廣間手合ひだな。

皆々 堪へられないわい、畜生め。

ト云ひ〜向うへ入る。

はつ あんな者ほど憎らしい事を云ふものは無いわいな。

ト本舞臺へ來る。

くめ モシ、今のお大名の供廻りわえ。

くら あれが定さんの噂の、お大名のお客さんのお供。お衆さん、口がかゝつてゐなさんすよ、お初さん、徳兵衛さんが待つて、あつたよ。

はつ そんならアノ、昨日の朝から、口をかけて今日來なさんしたが、平野町の徳兵衛さんとやらで、お大名のお客さんへは、わたしや後口。そんなら遠山の殿様には、いよく御家督遊ばされて、

それで今日のお入り。折悪い昨日から、徳兵衛さんの先口。辛氣な事ぢやなア。 七二四

ト通り神樂、流行り唄になり、向うより仁太、頬かむり、刺し子、股引、籠へ小松菜を入れ、擔ぎ出て来て

仁太 大把小松菜、冬菜大把え。

ト云ひく本舞臺へ来る。下座より下男一人出て

下男 菜よ、把はよいかな。

仁太 菜は大把で云ひ分なし。

ト籠を下ろし、菜を持つて来て見せる。

下男 いくらだえ。

仁太 二十づゝに賣るのだが、もう仕舞ひだ。十八づゝにしてあげう。

下男 この菜を十八だといつて、買へるものか。災難々々。

ト仁太、菜を持ち、ムツとして

仁太 この菜を災難とは、菜を買つた事が無いさうだ。とんだ猿唐人だ。

ト荷を擔ぎ、行かうとする。

下男 べら坊な商人ぢやアないか。賣り物買ひ物、いくらにでも附けるわえ。老碌め。  
仁太 なんだ、老碌だ。うぬを

ト天秤棒でぶつてかゝる。皆々とめる。曲撥になり、お初お衆お倉、逃げて入る。九平次出て、こ  
れをとめて

四平 待ちやれなく。

下男 エ、とめさつしやるなく。

仁太 コレ、葛西の者はナ、麥飯は食はないワ。新米で育つてゐるわえ。うぬを叩ツ挫いて

トまた立ちかゝるな

九平 マアく、待ちやれな。

ト双方をとめて

菜を廉く附けたといつて、喧嘩になる奴はある事だ。若イ衆も、要るならば見倒さずと、買つて  
やればいゝ。こなたも葛西から来て、喧嘩をするでもない。

仁太 喧嘩をしたかアねえが、あんまりな附けやうをするから

下男 其方もあんまりな掛け値だから廉く附けるのよ。

九平 おらア供部屋に居たが、斯う挨拶に出たからは、互ひに不請してもらはう。十八だといふのを、七つに附けたからの喧嘩だ。おれが仲裁だ。十二にまけておいて、若い衆、有りつきりだ。買つてやらつしやい。

下男 ようござる。お客のお供の衆の挨拶だ。

仁太 商ひさへ出来れば、わしも料簡するのサ。

ト菜を数へ

十三把ぎりサ。

九平 おれも油の九平次といはれては、仲間でも人に知られてるれば、只も置くまい。仲直りに、供部屋へ来さつしやい。

仁太 わしも葛西の曲り金で、江戸へは毎日商ひにも来る。また鎌倉河岸や親仁橋へも来る事があるから、芝居の一幕も見て、幸四郎の声色をちつとべいやるから、高麗屋の仁太くと、そこで曲り金の仁太といふ菜賣り。在郷者にやア、ちつと氣のきいた野郎サ。

下男 そんなら菜賣りと仲直りに。

九平 わしが飲んだ一銚子で

仁太 引ッかけべいか。

ト騒ぎになり、仁太、籠を擔ぐ。チヨンノ〜にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、見附け下の方折廻し屋體。釘隠しの長押、黒塗り縁、極彩色の杉戸。上方折廻し、塗り骨の障子屋體。花道に二階の上がり口。爰に甚三郎、酒盛りの體。お衆、三味線。お倉、おさの、酌にて、下の方に運太夫、里之進、平伏してゐる。騒ぎにて道具とまる。

ト直ぐに「獅子とらでん」の「石橋」の切れ、鳴り物入りになり、花道二階の上がり口より、紋五郎、獅子をかむり、三次、笛、權八、太鼓にて出て来て、舞臺を舞ひあらく。

皆々 ヨウ〜。

ト賑やかに褒める。獅子は下座へ舞つて入る。三次、權八、行かうとするを

甚三 コリヤ〜、太神樂の者、待て〜。

二人 ヘイ〜。

ト下の方へ来て辭儀する。

甚三 三尺の劍を以て、惡魔を拂ふとある太神樂の獅子舞ひ。

運太 餘の儀は格別、悪魔除けとござりますれば、先づは  
運里 おめでたう存じ奉りまする。

さの ホ、ハ、ハ、堅くるしい、何の事ぢやぞいなア。

ト太鼓諷ひになり、奥より定六、掛け盤に松竹梅の臺の物を飾り、これを持ち出て来て  
定六 行く末守れと神託の、告げを知らせる松風も、梅も久しきためしぞめでたけれ。

ト甚三郎の前に置く。

甚三 これは定六、過分々々。

くめ 定さんは植木屋だけに、松竹梅の臺の物。

運太 時の献上、殿にもお喜であらう。

さの とんと石部金吉さん。

運太 イヤ、身共は長谷部運太夫と申す、側役の者だ。

トおさの、杯を持ち、運太夫の側へ行き

さの 一つ上がりませんか。

運太 下戸でござる。

トお倉も行って

くら お茶漬わえ。

運太 時分でござらぬ、欲しうない。

トきつと云ふ。お倉恟りする。

定六 ハテサテ、運太夫さまには、堅いぞく。とんと太神樂の曲撥が、くつついて離れぬといふも、  
幫間に縁がある。藝者衆の見えるまで、太神樂の衆も、賑やかに、洒落たく。

三次 洒落ろとあれば、鹿島踊りかお龜の栗餅。

權八 それく、その栗餅の拍子にて、餅になれことく。何餅にことく。

二人 イヤ、幫間にことく。

ト笑ふ。樂の三味線ばかりになる。甚三郎こなしあつて

甚三 洒落いと申しつけたれば、幫間の名代、それに運太夫が汚い顔の不興。彼れにも洒落させ  
い。

里之 イヤ、その儀は運太夫どのには

定六 ハテ、そこが殿様の御意なれば、モシ、ちつとお洒落なされませ。

運太 馬鹿な事を

七四〇

ト睨みつける。

甚三 コリヤ、運太夫、忠義には身命も擲つてと申すではないか。洒落ぬか。

定六 マア、わしが洒落れば口輕に、阿波座烏か藪鶯とは高麗屋、あの殿様は紀伊國屋。しやれ、厄體もない。

運太 その洒落とやらを、武士が申して濟まうか。ハレ、厄體もない。

皆々 アレ、矢ッ張り洒落でござりました。ハ、ハ、ハ、ハ。

甚三 して、當所の妓婦なる、初は如何いたした。

くら お初さんは、この間からのお約束で、外のお客へ出なさんして、どうも此方へは見えられません

女皆 お氣の毒でござんす。

定六 その御立腹もござりませうと存じまして、新子に美しい、お宮さんと申すのを、呼びましてござりまする。

甚三 イ、ヤ、外の遊女妓婦には、なか／＼手前目はかけぬ。定六、不埒であらう。

トきつと云ふ。

定六 ヘイ、ハ、ハ。

運太 然らば殿には、その初と申すさへ御自由になりませねば、お歸りでござりまするか。

甚三 元より。

運太 もし初が居りますれば

甚三 執心なれば、翠帳紅閨の枕も同じうする樂しみ。

ト運太夫指りより

運太 殿には御幼少の砌りより、この長谷部運太夫が、乳人の役にてお育て申し、御家督と相定まれど、御本腹の御舍弟様へ、お譲りあつたれども、又ぞろ今般御家督にて、近々御任官あれば、從五位下、朝散太夫とおなり遊ばさるゝ御身にて、この遊里へお入り、その初と申す女のみに限つての御執心は、如何の儀にてござりまするか。

甚三 運太夫が申す條、理りなれど、甚三郎浪々のうち、稀なる深切、下々に稀れな貞女、兩夫に見えずの本文。手前その志しもだし難く、誓紙まで渡して、未來永々刀にかけて、君子に一言なし

七四一

色一座梅椿

大南北全集

の誓言立てたれば、なか／＼約は變じられぬ。

運太 されば拙者も再勤を相願ひまして、御歸参のお迎ひ、併しながら、もと初が兄と申すは、甚だ以て悪者ゆる、どうござつても身請け致し、お部屋様には罷りなませぬ。

ト獅子の鳴り物になり、下座よりお初逃げて出る。跡より太神樂の獅子追ひかけて、あちこちと追ひ廻す。お初逃げ廻り、思はず甚三郎の側へ行き、突きあたり、恟りする。

甚三 これは不賤千萬な。

トお初、顔見合せ

はつ ヤア、甚三郎さん。

甚三 オ、初か。手前、其方に逢ひたうてくならなんだが、外の座敷へ出てとの事。どうして爰へ。

はつ さいなア、あなたのお入りも承つたが、わたしや徳兵衛さんの座敷へ出てゐるれば、あの太神樂の獅子が追ひかけて、やうくと逃げ廻つて、爰へ来たところが、思ひがけない甚三郎さま。

女皆 そんならあの獅子が追ひかけて

運太 殿のお側へ参つた女が、お初女郎か。イヤ、呆れるワ。

ト思入入れ。

甚三 初が目通りへ参つたれば、甚三郎は、どつこへも動かぬく。

運太 イ、ヤ、それでは相濟まぬ。

甚三 主命そむく不届き者、下宿へ下がれ。

ト運太夫思ひ入れあつて立上がり

運太 下世話の譬へに主と病ひだ、是非がござらぬ。これといふのもお初女郎。おのれ憎くい。

ト刀に手を掛けうとして無腰ゆゑ

ア、大小は預け置いた。手持無沙汰もない事ぢやなア。

ト唄になり、運太夫思ひ入れあつて、里之進附いて梯子へ下りて入る。あと合ひ方。

定六 殿様、まづお庭の毛蟲は拂ひました。

ト甚三郎こなしあつて

甚三 初がこれへ参るからは、打解けて席を同じうせねばならぬ。

ト懐より箱入りの香爐を出し

この袖香爐は大切なれど、帳中にあつては邪魔なれば、コレ、藝者のお衆とやら、其方に預くるほどに、大切にどこぞへ預けておいてたも。

くめアイ、合點でござんす。

ト香爐を取つて

おかみさんへ、しつかりと預けて置ませう。

ト合ひ方になり、梯子へ下りる。

甚三 先つ何より出かしたは、太神樂の獅子舞ひ。

九平 その思ひつきは、わしでござりまする。

ト獅子の中より九平次、紋五郎出る。

甚三 ヤア、其方は手廻りの草履取り、九平次ではないか。

はつ ほんに兄さん

九平 コリヤ、滅多な事を云ふまいぞ。何にも知らぬ獅子、ナ、獅子の中へ入つて、運太夫さまの

毛蟲を拂ひ、お初さんが殿様の自由にならぬから、そこで太神樂と獅子を舞ひ歩き、お初さんを

怖がらして追ひかけたも、殿様にお逢はせ申さうため。なんと、草履取りの中間が、中位るな忠

臣でござりませうな。

甚三 そんなら初を爰へ呼ぶ爲といひ

さの 堅造の毛蟲を拂ふばかりに

三次 この獅子の後足とならつしやれたも

九平 お初さんの矢ッ張り心中。

甚三 すりや、獅子心中の毛蟲を拂うた忠臣ぢやなア。

トお初を引寄せる。

女皆 お初さん、嬉しからうね。

甚三 サア、これへ參つて、酒を飲めく。

九平 ヘイ、私は恐れ多うござりまする。

甚三 ハテ、深川の遊里の事、貴賤の隔てはない。何なりと、看を取らせいく。

九平 左様なら、お看ばかりを戴きませう。

ト思ひ入れあつて、お初の手を取つて行かうとする。

はつ こりや、何なさんすえ。

九平 知れた事、看に貰つて行くのだ。

ト甚三郎驚き、キツとなつて

甚三 ヤイ、九平次、手前の草履を直す身分にて、執心たる初を手籠めに致す不届き者。  
九平 お初といふはわしが妹、肴に貰つて連れて行つて、外へ賣つて金にする。

ト甚三郎また恸りして

甚三 何と云ふ。初を妹といふからは、皆の者が包み居たれど、噂の悪者は其方ぢやな。  
九平 悪者は知れた事、お初が年季の立て金は、殿様から肴に貰つた妹だ。連れて行つて

トお初にかゝらうとする。

甚三 ヤア、九平次め、目通り叶はぬ、下からぬか。

九平 イ、ヤ下がるまい。この深川へ来て遊べば、お大名でも町人でも折助でも、金さへあればお客の色里。云ひ分があるか。

甚三 ヤア。

ト思ひ入れ。

九平 サア来い。

ト嫌がるお初を引ツ立てる。この時下座より徳兵衛、着附、羽織、材木屋の派手なる拵へにて、煙管と箕盆を持ち、ズツと出てお初を引退け、九平次を取つて投げる。皆々恸りして

女皆 ヤア、お前は平野町の徳兵衛さん。

九平 なんておれをば投けたのだ。

徳兵 水道の水は離れても、色と戀との流れの深川、その水で育つたからにやア、こんな事は見て居られぬ。いま聞けば、この深川へ来て遊べば、大名町人、また折助でも、同じ事だといふからは、なんほお初が兄とやらでも、この徳兵衛がさうはさせない。

九平 そりや又なぜ。

徳兵 お初が年季の立て金は、あの殿様の方から出て、酒の肴にお初を、おぬしが貰つて行かうとは、そりやア其方の勝手づく、今日のお客は徳兵衛さまだワ。

九平 さう云へば、成る程さうだ。

徳兵 深川者で材木の、小口もきいてこれまでに、鋸屑出さず真直な、柱な木目の平野町。向うが素直に杉丸太の、人と見たらばどこまでも、頼もし強いが一つの徳兵衛、いぢくね悪い松丸太の、曲つて来ればエンヤラヤツと、おれが鳶口ぶツつけても引摺り出す。お初は揚詰め角物の、水離れもさしやアしない程に、この女が河岸揚げは、マア成らないよ。

九平 野痴言を聞く隙は無いわえ。



トお初にかゝらうとするを、徳兵衛また引退ける。九平次、懐より二幕目の手紙を落す。徳兵衛取つて見て

徳兵 久々お目もじ致し申さず候ふ。さてはこの度與兵衛こと……この與兵衛といふは。  
ト九平次恠りして

九平 その手紙を

ト取らうとする、立廻り。徳兵衛、九平次を捕へようとする。ゴンと暮れ六つの鐘鳴る。  
女皆暮れ六つぢや。灯をつけて。

ト徳兵衛、ギツクリと思ひ入れ。お倉、おさの、燭臺を運ぶ。徳兵衛、鳥目のこなし。九平次、合點のゆかね思ひ入れあつて、徳兵衛をトツクリと見て

九平 手紙の跡の文言は、

徳兵 ヤア。

ト思ひ入れ。

九平 なぜ跡を讀まない……聞えた。徳兵衛とやら。男は立派で、綺麗を飾つて、氣のきいた風體だが、鳥目だな。イヤサ、脾胃でも悪くしたか。何の事はない、年季野郎の境涯だ。目薬に、鰻の頭で

も食やれな。

徳兵 どうしておれが鳥目であらうぞ。

ト徳兵衛、あたりへ心遣ひのこなし

九平 それでも手紙の、跡は讀めるか。

徳兵 イ、ヤこれは。

九平 ドレ、それを

トまた取りにかゝるを。徳兵衛拂ひのけ、九平次、身を引く。

ドッコイ、爰だ。

ト徳兵衛、九平次を捕へ損なひ、前へ轉ばうとして、思はず臺の物の掛け盤へ行き當り、ちやつと探りながら、梅の枝を取上げ見て、こなし。

徳兵 ハテ、この梅は好く咲いたなア。

ト思ひ入れ。合ひ方。九平次こなしあつて

九平 用の手紙を落したは、おれが誤まり。夜明までは徳兵衛が揚げ。明けたら直ぐに妹を  
はつエ。

ト思ひ入れ。

七五〇

九平 連れ立つて

ト徳兵衛の持つてゐる手紙を引つたくる。徳兵衛「それを」と行かうとして、九平次と、すかまにゆ

く。  
長居は恐れだ。

ト唄になり、九平次ツイと奥へ入る。徳兵衛、跡見送り、こなしあつて

徳兵 ハテ、理不盡な奴ではあるぞ。

ト甚三郎こなしあつて

甚三 平野町の材木商賣、徳兵衛といふは、文藏が兄にて、手前屋敷へ由緒ある出入りの町人。先達て  
歸參の節も、文藏が働きにて、金子調達によつて、四方出の香爐手に入り、めでたう家督も相濟  
む。殊に只今悪者の九平次を退けしは、甚三郎を大切と思ひ、遠山家の恩義忘れぬ致し方。過分々々  
女皆 徳兵衛さんのきつい働き。

はつ ほんにわたしや、嬉しうござんすわいな。

徳兵 知れた事。徳兵衛が揚げなれば、いはゞ女房。

ト甚三郎合點のゆかねこなしあつて

甚三 ナニ、初を女房とは。

徳兵 殿様には、きつい御料簡違ひ。出入りは出入り、また色里の遊びは遊び。徳兵衛が揚げのお初。

お大名でも殿様でも、指でもさゝしは致しませぬぞ。

甚三 コレ徳兵衛。

ト急いたるこなしにて徳兵衛の側へ摺り寄り

すりや、遠山家の事も思はずに、お初に惚れての事か。コレ、手前と初とは、並大抵の事ぢやと  
思ふか。

はつ 殿さんの御流浪の其うちにも、互ひに深う云ひ交して、二世と誓うたあなたとわたし。

甚三 見捨てまいと、誓言が起證。徳兵衛、其方は見下け果てた者ぢやぞよ。

徳兵 イ、ヤ、どこまでもコレ

トお初を捕へようとして、バツタリとなる。お初逃げようとする。裾を捕へて

お初はおれが揚げだぞよ。

ト引寄せる。

七五一

甚三 それでは武士が立たぬわやい。エ、ハ、ハ、ハ。

ト口惜しきこなし。騒ぎになり、二階の上がり口よりお宮、新子の拵へにて出て来て、ツカくと甚三郎の側へ行き、手を取つて

みや サア、お出でなんし。

甚三 行けとは、どこへ。

みや 知れた事。わたしと寝に。

ト甚三郎惘りして

甚三 不躰千萬な。其方は何者ぢや。

定六 ぬしが、先刻申し上げました、お宮さんといふ、新子の女郎衆でござりまする。

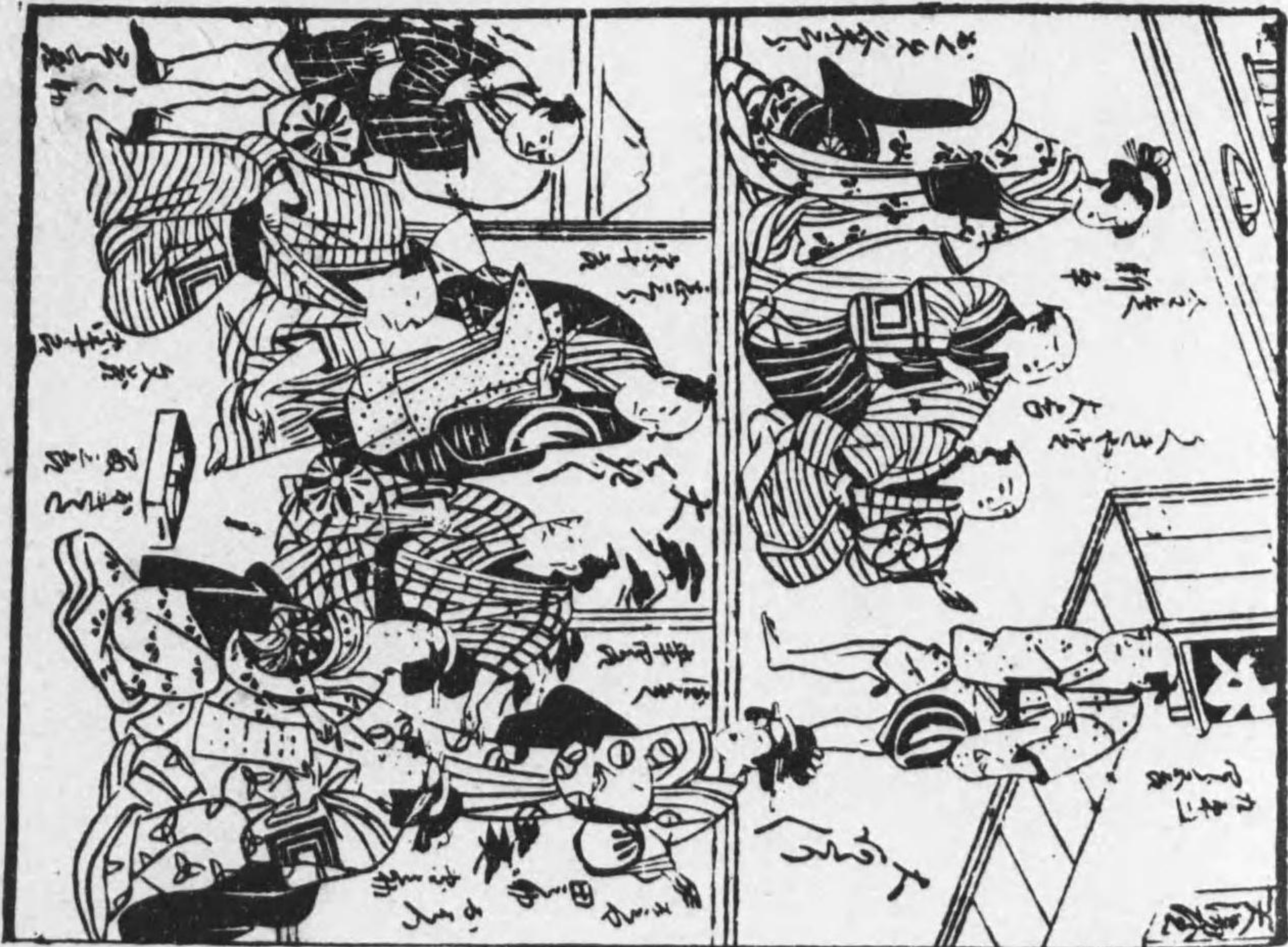
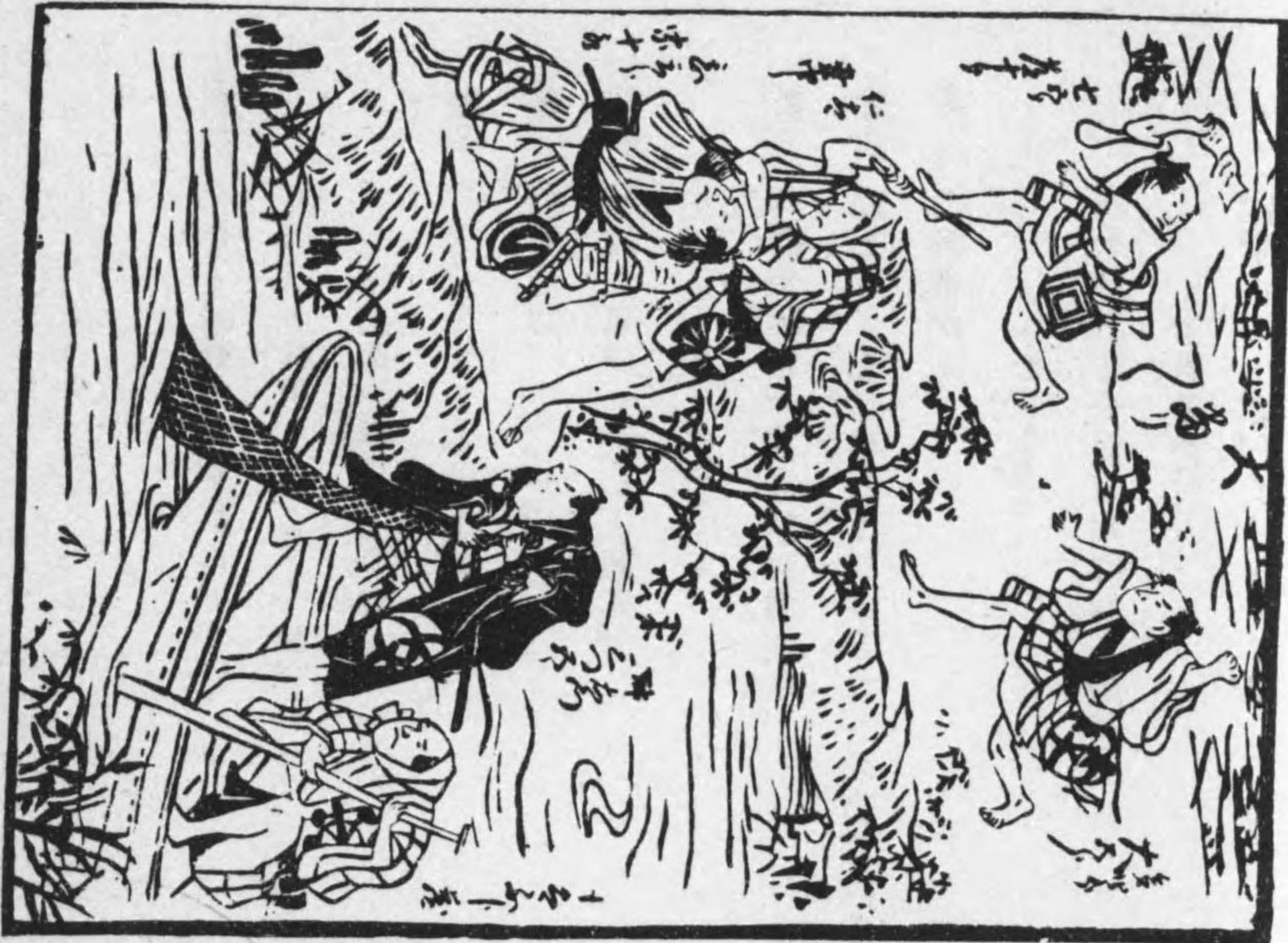
甚三 この者が

トお宮を見て

ハテ、あでやかな女は女ぢや。

ト思ひ入れ。

みや 先刻からの様子は、みんな聞いてるやんすが、憎らしいは殿さん。わたしに口を掛けて置いて、



外聞の悪い、揚げ干しにしなにして、お初さんの事ばかり。エ、アタ好かん。

甚三 なんほ好かれうと思つても、君子二言無しを守らねばならぬわやい。

みや アレ、矢ッ張りイケ好かん事を。

トこなしあつて

わたしや新子の事なれど、中裏へ来ては勤めの意気張り。どうで板頭のお初さんに叶やすまいがまた初會ちやというて、お客に嫌はれ、揚げ干しになつては、見番での笑ひもの。ぬしとちよつとでも寝ぬうちは、苦界の道の顔が立たんによつて、否でも應でも寝るほどに、マアさう思つておくれなさんせえ。

はつ そんならわたしが、徳兵衛さんの揚げになつてゐて、殿様の儘にならぬゆゑ、お前が口を掛けられたによつて、殿様を是非お客になさんすのかえ。

みや アイ。

甚三 それではどうも。

ト徳兵衛、前にある右の梅の枝を取上げ

徳兵衛、甚三郎さま。

ト梅の枝を甚三郎の鼻の先へツイと差出す。甚三郎恟りして

ト徳兵衛ちやつと枝を引取り、鳥目と見せぬこなし。お宮、臺の物の松の枝を取つて、この途端左右より、梅松の枝を差出す。甚三郎キツと見る。太鼓入り。とつちりこんの合ひ方になり、三人思ひ入れ。

甚三 徳兵衛は梅の枝、お宮とやらは臺の物の松の枝、手前に差出した心は。聞えた、天満屋の縁によつての、こりや謎か。

徳兵 そのお初天神の、御神木の梅の花でも、徳兵衛といふ揚げがあつては、花守りの目を盗むやうなもの、物云はねどこの梅ヶ枝。

ト枝を折つて  
思ひ切つてしまはつしやりませ。

はつ そんなら。

ト立上がらうとするを、徳兵衛また裾を捕へる。  
エ、辛氣な。

トちつと俯向き、思ひ入れ。

甚三 ヤイ、初、今は勤めの身となれば、金銀づくにて儘にならねば、あの徳兵衛が申す通りか。イヤ、サ、其方が心は

ト急いたるこなし。お初、黙つてゐて、鏡袋を出し、額を直す。  
手前が事は不承知か。どうだ。

トきつと立腹の思ひ入れ。お初こなし、お宮、思ひ入れあつて

みや 捨てる神あれば助ける神とは、天神様の事であらうが、筑紫へ捨てられ、その腹立ちの、無念無念が凝り固まつて、雷様とおなりなさんして、都の北野で助ける神。梅と松とは御神木。松は常磐の色かへぬ、位は太夫天神の、全盛さんでもアイ、板頭さんでも、今の勤めの宮が心は同じ事。まだお見立のお杯も、戴かねど口を掛けられ、呼ばれたがわたしが意地。千年をかけて變らぬ色の、よい返事を松の枝。ちつともお目にはとまらぬかえ。エ、腹の立つ。

ト甚三郎へ思ひ入れ。甚三郎キツと思ひ入れあつて

甚三 その志しは過分なれど、どうも今云ふ、君子二言無しが  
みや アノ、どうでもかえ。

トちれつたきこなしにて

エ、あんまりでく、焦れつたので、いつそ逆上せてほんにマア、大名さんらしくもないか  
いしよなし。エ、。

ト思はずしのぎを取つて頭を掻きながら、思はずしのぎを折る。甚三郎思ひ入れあつて

甚三 それ程までにか。

みや 呆れるよ。

ト甚三郎の横面をヒツシヤリと叩く。甚三郎「ムウ」と思ひ入れ。唄になり、お宮ツイと奥へ入る。

甚三郎キツとなり

甚三 おのれ、不屈き千萬。武士たる者の面體を打ちたる狼藉。今にも從五位下、朝散太夫に任官いた  
す手前へ慮外、言語道斷なる振舞ひ。うぬ、もう

ト無腰ゆる氣を急ぎ

大小持てく。

女皆 ハイ、お大小は、二階へは成りませぬ。

甚三 ムウ。

ト思ひ入れあつて

遊里の二階は女どもの慮外勝ち、刃物預けるも理り。貴賤の辨まへ無いのが、勤めの情でもあら  
うか……女に似合はぬ丈夫の魂ひ。遊里に稀れな

トお宮の跡を見やり

あの志しの

トまた思ひ入れあつて

愛い奴だわえ。

ト唄になり、甚三郎ツイと奥へ入る。

女皆 モシ殿様

ト女形皆々續いて入る。跡に徳兵衛、お初残り、こなしあつて

はつ あの様子では、慥かに殿様がお宮さんに

ト行かうとするを徳兵衛、お初を捕へて思ひ入れ。合ひ方になり

徳兵 これサ、待ちやれな。いつぞやからの中裏に、お初といふ名に惚れ込んで、こなたを揚げに来た  
徳兵衛。様子を聞けば弟の文藏も、天満屋へ遊びに来て居るとの沙汰。それも構はず兄弟連れの

女郎買ひも、皆こなたゆるゑ、何も恩にはかけないが、かけられるほど深川の、遊びが浸みねど内内の、心遣ひにこの鳥目。

ト云はうとして

とくく、わしに

トお初を引寄せようとして、思ひ入れあつて手を取り

早く寝やれな。

はつ 成る程、徳兵衛さんのお志し、嬉しうござんすが、いづぞやより勤めの身とはなつたれど、まだしみぐと枕をも、かはしたお客が無いといふも、殿甚三郎さんへ立てる心中。實のところを聞分けて

徳兵 八テ、思ひ切る程なれば、出入り屋敷の殿様と、楯を突いての云は、買ひ論。色といふ字がこの身の仇。仲間の者のあじやら詞に、大阪にある曾根崎心中、その名もお初徳兵衛と、浮名が立つたと噂され、仲町のお初を買はねば、徳兵衛ではあるまいと、酒の上での冗談から、買はねば濟まぬ仲間附合ひ。

トお初こなしあつて

はつ どうも、わたしや

徳兵 ようござんす。これ程に云ふに、靡く事がならずば、仲間附合ひの手合ひに見せる、ほんの見え坊だ。嘘でもい、起證を書いてくんない。

はつ エ……どうして起證が

徳兵 ハテ、勤めの身では空誓紙、工面の悪い時にあるやつサ。

トお初、徳兵衛の顔をサツと見て

はつ ぬしの鳥目では

ト云はうとして

ようござんす。書いてあげう。

徳兵 アノ起證を

はつ アイ。

徳兵 忝い。ドレ、硯箱を

ト立たうとするを留めて

はつ 爰にわたしの、鏡袋に紅筆が

徳兵 それは幸ひ。

トお初、鏡袋より紅筆と鼻紙を出す。

お定まりの、天罰起證文の事。

はつ 天罰起證文の事。

徳兵 そもじ様と二世の約束、致し申さず候ふ。

はつ エ……ナニ二世の約束、致し申さずとはえ。

ト惘りする。

徳兵 コレ、その跡は。

トお初を引廻し、思ひ入れあつて囁く。チョンく、曲撥になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、本縁側付き、屋根飾りの庇。見附け鼠壁、床の間、茶立て口、出入り。上方、九尺の二階、これも大和葺き、高欄付き。植込み、柴垣、手水鉢。いつもの所に枝折り門。この数寄屋に爐を切り、釜を掛け、何なりと軸物に水差し、棗、茶杓、柄杓飾りあり、爰に九平次思案してゐる。時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

九平 こんな茶の湯座敷へは來つげぬから、入つて見たが、敵討の狂言に、よく毒を服ませるはこんな所。

ト思ひ附いたる、なにして

こいつは好い事があるわえ。いづぞや團右衛門さまに頼まれ、何でもお屋敷の事といふと、ニユツと出て、さへへこさへを云ふ木屋の文藏。これを服ませてくれろと云つたが

ト紙葺入れより序幕の薬の包みを出し

これを服ませて、二時か三時の間に、五體惱んで死にもやらで、何となく苦しんでくる病になるは、當利散といふこの薬。たしか、その文藏も來てゐれば、好い間を見合せ、服ませたいものだが。

トまた思案して

爰にある茶の入れ物へ入れて置いて

ト飾つてある棗を取つて

イヤ、ひよつと文藏が來ずに、妹でもくらふと亂騒ぎ。こいつも危ない。

トいろく思案の思ひ入れ。下座、バタくとするゆる、ちよつと奥へ隠れる。碇の合ひ方になり、下



座よりお衆走り出て来て、ウロ／＼してあたりを見て、胸撫でおろし

くめ わたしが最眞の木屋の文藏さんが、金兵衛さんの持つてる金を、何やら見たがつこぢやといふ事を聞いたによつて、どうぞ／＼と思つたが、金兵衛さんが寝てぢやによつて、そつと財布の金の金を

ト懐より金兵衛の金財布を出して

これを盗んで文藏さんへ。

ト持つて行かうとして

イヤ／＼、丁度いま逢へばよいが、さもないと、また見咎められては

ト思案して

マア、それよりは先刻の香爐の事。

ト懐より右の香爐の箱を出して

この箱の中へ財布の金を

ト財布より二百兩の金を出して、箱より香爐を出して

斯う箱へ入れて

ト二百兩を箱へ入れて

斯うして置いて、香爐と云うてお北さんの所へ預けて置いて、間を見合せ、文藏さんに。また香爐を財布へ入れて

ト財布の中へ香爐を入れ

斯うやつて、金兵衛さんの寝てるなさんす側へやつて置けば、ぬしが金と思つて……どうぞちつとのうち知れぬやうに。南無妙見さま、金毘羅さま／＼。

ト拜む。此うち下座の柴垣より仁太、見てゐる。後に九平次出かゝり、兩人とも金の欲しきこなしにて、いろ／＼思ひ入れあつて

九平 コレ、姐さん。

仁太 その香爐の箱の物を

トすつと前へ一時に出る。

くめ エ、。

ト惻りして、ちやつと財布と箱を懐へ入れる。仁太、九平次、顔見合せ

こなさん、先刻の

九平 茶賣りどの。

仁太 お中間。

兩人 ヤア。

ト大きに恟りする。

くめ お前方はわたしに

トおどくして云ふ。

兩人 イヤ今の

ト云はうとして顔見合せ

用は無いよ。

ト仁太、九平次、元の所へ入る。

くめ マア落ちついたわいな。

トまた仁太、九平次、うそく出て来て、思はずお糸と三人顔見合せ

兩人 ヤア。

くめ エ、。

文藏 誰れぞ茶座敷には居ないか。

ト九平次恟りする。

剛氣に酔つたぞ。茶が飲みたいく。

くめ ヤア、ありや文藏さん

九平 ナニ文藏が茶が飲みたいと。めめたワく。

ト手を打つて喜ぶ。お糸ツイと下座へ入る。

なんでも文藏が爰へ来て、茶を飲むに違ひはない。爰でこそ當利散を

ト薬包みを出して棗へ入れ

斯うして置けば、文藏がくらつて、二時三時たつと薬が廻つて、五體惱亂、ぐなく。こいつは  
巧いワ。イヤ、くらつたら旨くもあるまい。

ト下の方へ窺ひく入る。合ひ方になり、奥より文藏出て来て

文藏 誰れぞ一杯飲ましてくれないか。

ト下座よりお宮、庭下駄にて出て来て

みや 文さんかえ。

文藏 お宮か。

みや きつう酔ひなさんしたね。

文藏 ナニ、さうでもないのサ。

甚三 それに居るは、木屋の文藏か。

文藏 これは遠山の殿様。

甚三 屋敷へは由緒ある、出入りの徳兵衛こと、手前執心の初を揚げにしての不埒、それに替りて其方が實義。今日向商賣向きも、文藏に申しつくるしるしとして、幸ひなる手前が上下、これにて拜領いたさせる。ソレ

ト上下を脱いでやり

早く着せ。

早く着せ。

文藏 ハツく、當座の御褒美、有り難く頂戴いたします。御免下さりませう。

ト上下を着る。

甚三 女郎買ひの座敷にて、上下とはこれも風流。

文藏 その風流とやらは、とんと知りませぬ武骨の文藏。

甚三 剛氣朴訥は仁に近しと、無骨が風流の第一。

トお宮を見て

その武骨にて、先刻手前の面體を打つて、慮外なしたるは其方ではないか。

ト此うちお宮、其のんでゐて、甚三郎をザロリと見て

みや 慮外なしたがお腹立ちなら、どうなとなさんせ。

トつんとしてゐる。甚三郎思ひ入れあつて

甚三 ハテ重々の

ト云はうとして氣を變へ

ア、酔うたぞく。

ト思ひ入れ。始終合ひ方にて、奥より梅吉、矢張り搔卷の形にて出て來り

梅吉 お宮さん、見番から着替へが來たからあけるぞえ。

みや 着替へなら、其方へ置きなさんせ。

ト梅吉行かうとする。

梅吉さん、先刻見てゐなさんした、柳樽の本があるなら貸しなさんせ。

梅吉 爰に持つてゐるわえ。

ト懐より右の柳樽を二三冊出す。お宮取つて見て

みや「梅ヶ枝は、萬年青の實まで拾ひ込み」。どうも面白いね。

梅吉 慾張つた女郎衆 ア。

甚三 文藏、小夜着をまとうた、あれは何者ぢや。

文藏 あれは爰の内の抱へ藝者で、久しく煩らつてゐます。これも大方川柳に。

ト本を見て

「煩らうた、藝者三筋の糸と瘦せ」。

梅吉 エ、アタ好かん。

文藏 どうでよくなつたところが

ト本を見て

「見番は、みな俗名へお線香」。

梅吉 まだ其やうな事を。

ト向うより慾助、貨物屋にて、風呂敷を持ち、出て来て

慾助 お見世へ参りましたが、奥の茶座敷にござるといふ事だ。

ト云ひく甚三郎を見て

遠山甚三郎さま、これにお出でなされましたか。

甚三 損料屋慾助ではないか。

慾助 根岸の植木屋に居候ふの時、度々お貸し申した損料代。

甚三 その代金なら、なぜ屋敷へ取りに参らぬ。

慾助 ハテ、お屋敷へ参つたれど、出入りの外商人無用と、外の者を入れませぬ。そこで私しもみや「樊噲も、頼みませうと初手は云ひ」。

ト本を見てゐる。

慾助 なかく頼みませうどころでは、お目玉を貰ひますから、お駕籠訴を致さうと思つて、借金乞ひの願ひ書。

ト懐より書附を出す。文藏取つて開き見て

文藏 「書附けを以て申し上げ奉り候ふ。御流浪の砌り御貸し申し上げ候ふ損料代、三十三兩、御催促申し上げ候へども、御拂ひ御座なく、その上御歸參これあり候ふても、御門留にて、難儀仕り候ふ。もし御拂ひこれなく候へば、御召し物なりと引剥ぎ申し候ふ。遠山甚三郎さま、損料屋惣助。……こりや書附けでの借金乞ひ。」

甚三 尤もな事なれど、供の者も離れ居れば、只今金子調達は。

惣助 イヤ、云ひ譯は聞きませぬ。損料代の三十三兩、お屋敷へ参つて受取りまする證據の御紋付き。

脱がつしやりませ。

ト甚三郎にかゝる。文藏、惣助を引のけ

文藏 うぬ、殿様へ慮外するののか。

甚三 イヤ、文藏、苦しいない。手前浪々の砌り、借用いたしたに相違ない。惣助が望みに任せ、脱いでやらう。

惣助 知れた事サ。

ト甚三郎、上着白無垢を脱ぎ、長褌袴になる。惣助風呂敷へ包む。紙挟みを落とす。

文梅 殿様のこのお形、ほんにお氣の毒な。

ト甚三郎、本を見て

甚三 「居候ふ、おゝくび形の餅を食ひ。」根岸に居つた浪々を、思ひ出せば残念にもないわえ。

惣助 いつもの借金乞ひとは違ひ、無理に引剥ぎもしないから、憎まれもしない。したが、借金乞ひのお定まり、たつた一つは。

ト甚三郎を蹴る。文藏、直さま取つて抛り出し

文藏 罰が當るわい。

惣助 知れた事だワ。

トうろたへ、襦袢の包みと取違へ、持つて入る。梅吉、甚三郎を見て

梅吉 ほんにマアお氣の毒な。わたしが着たのでも大事なければ、この搔卷を憚りながら

甚三 過分

ト搔卷を脱いで甚三郎に着せる。

トこなしあり、紙挟みを懐へ入れる。文藏、甚三郎を見て

文藏 名におふ一萬五千石の殿様が、古借金の催促に、脱いでやつての素ッ裸。

文藏 とんだ世話場になつて来たわえ。

甚三 この佗で、茶の湯はどうであらう。

文藏 茶の湯といふものは、むづかしいものぢやござりませぬか。

甚三 何もむづかしい事はない。手前がこの夜着を着たのと、其方が上下を幸ひに、佗びての薄茶。

文藏 どうして私しのやうな、傳法と同じ者が、お茶の給仕が

ト思ひ入れあつて

何もお慰みだ。あの沸る湯で、茶を一杯かき立つてあけう。こいつもおつりきだわい。

ト二重舞臺へ上がり、甚三郎は客座、文藏は亭主にて、茶を立てる思ひ入れ。甚三郎、紙挟みより香

包みを出し

甚三 香を炷きたいが、そこらに香爐が

ト思ひ入れあつて

斯様な時こそ、家の重器の四方出の香爐で、火加減よく炷きたいが……コリヤ、煩らうた妓

婦、先刻お衆に申しつけ、預け置いた手前の香爐がある。取つて来い。

梅吉 そんなら、おかみさんの所へ行つて

ト合ひ方になり、梅吉奥へ入る。下座、バタ／＼にて金兵衛、お衆を引立て、財布を持ち出て来て

金兵衛 おのれ、太い奴ぢや。いつの間にやら、おれの財布をちよろまかしたな。誰れに頼まれて盗んだ。

サア、有やうに吐かせやい。

トお衆をぶつて突きめす。

くめなんのわたしが盗まうぞえ。お前が酒に酔うて、この財布を抛り出してゐたによつて……先刻文

さんが、お前の金を見たいと云ふ事聞いたから

ト云はうとして

いらぬわたしが

金兵衛 ハ、ア、そんなら相摺りは文藏か。

文藏 ヤ。

ト思ひ入れ。

金兵衛 イヤ、文藏どの、最負したのか。ハテ、物好きな。おのれ、叩いても同類を

トお衆にかゝらうとするをお宮、ツカ／＼と行つて金兵衛を引退け

みや 何も其やうになさんすな。あの子はきつい團十郎最負ぢやによつて、文さんの事を

金兵 それで金を欲しがつたのか。きつい最辰ぢやなア。  
みや 江戸ッ子が團十郎最辰は當り前サ。

ト金兵衛、お宮を見て

金兵 こなさん、美しい顔をして、わしを凹まさうとしてぢやが、わしが阿房らしい事を聞かんせ。今日靈岸島に質を見に行つて、相談が出来ぬから、この間から新子のお宮といふが出たと聞いて、廻つた道で文藏どのに逢うたら、先達ての二百兩の金、見せてくれと云ふが、合點がゆかぬ。その上、新子のお宮も出ずに、この二百兩を取られてよいものかいなう。

みや そのお宮といふはわたしぢやから、何にも云はずに、わたしが云ふ事聞いて、料簡なさんせ。  
金兵 何ぢや、宮といふは其方ぢや。ヤア、。

ト惘りして

道理で美しいと思うた。それについても、あのお衆め。

トきつとなるを又とめて

みや モシ、わたしが云ふ事

金兵 オ、きくくく。

梅吉 先刻お預かり申しました、あなた様の香爐を  
トぐんにやりとなるこなし。此うち奥より梅吉、香爐箱を持ち、出て来て

ト差出す。

甚三 それに置けく。

ト梅吉入る。

金兵 時に、中がどうなつてゐるか知れん。ちよつと改めて

ト財布を明けて、香爐を出して惘りし

ヤア、こりや二百兩ではなうて、香爐ぢや……しかも覚えある四方出の

ト甚三郎文藏も惘りして

文藏 ナニ、四方出の香爐とは。

甚三 手前が所持たる

ト箱を明けて見て、惘りして

こりや金子ぢや。

文藏 殿様え。

甚三 よろしう計らへ。

ト文藏、金を取つて見て改め

文藏 こりや四つ石の極印の金二百兩

金兵 そんならおれが財布の金を、その香爐と、摺りかへたのはこのお衆め。

ト又きつとなるを

みや モシ、わたしが挨拶わえ。

金兵 きくくく。

トぐんにやりとする。

文藏 金兵衛どの、お衆が相すり文藏を、最戻するのと云つたが、そんな事は構はないが、こなたの二

百兩が此方にあつて、香爐が其方であれば、をかしたるものぢやアあるまいか。

金兵 イヤく

ト考へて

イヤサア、いつぞや二百兩で請けさせたこの香爐が、また此方にあつて、其方に金があつては、

これでは太郎兵衛駕籠ぢや。

文藏 この金は此方に少つと

ト思ひ入れあつて

サア、さしかゝつて殿様の、御重器の香爐と、どう間違つたか財布と箱。

ト金兵衛のみ込んだこなしにて

金兵 何にも云はずに取替へませう。

ト香爐と金を取替へる。

みや それもわたしが云ふ事を

金兵 きいたから濟んだのぢや。

くめ それではわたしに科は無いかえ。エ、。

ト喜ぶこなし。

文藏 あの金を取戻すには

ト思案の思ひ入れ。時の鐘鳴る。

くめ 金兵衛さん、あの鐘聞いて時酒に

金兵 あの鐘よりは、わしが云ふ事コレきいて。



トお宮に取つく。

みやエ、知らんわいな。

ト突きのめし、此方へ来て貰のんである。

金兵 いまくくしい。仲直りにお衆と時酒。

くめ エ、せう事なしに

金兵 イヤ、山科ぢやない。

くめ お宮さんが

金兵 だましたのぢや。

ト唄になり、お衆逃げるを、金兵衛追ひかけて下座へ入る。

甚三 大切な香爐を、たゞ慰みには遣はぬ事ぢや。

ト香爐を箱へ入れ、懐中する。

文藏 ドレ、茶を掻き廻してあげませう。

ト茶を立てる。これより尺八入りの合ひ方になり、甚三郎、お宮を見て思ひ入れ。お宮、甚三郎の方を見て、柳梅の本を明けて

みや 「大鳥毛、高尾立派に振り通し」……どうしても川柳といふものは情があるて。

ト甚三郎思ひ入れあつて

甚三 その柳梅といふは酒の事か。

みや こりや俳諧の本サ。

ト文藏茶を立て、甚三郎に差出す。取つて飲みながら

甚三 大方、濃茶薄茶の事などもあらうな。

文藏 それも慥か、「青海苔を、掻き立つて飲む澁い面。」

甚三 これはお服加減。

ト飲みしまひ、舌打ちする。

文藏 ハ、ハ、ハ。

ト笑ひながら平舞臺へ下りて

この川柳ほど、馬鹿に面白く拵へたものはないよ。

ト甚三郎も下りて来て

甚三 ドレく。

トそこにある本を取つて見て

俳風柳樽「松井屋は、奴一人をなぶり切り。」

文藏 こりやア居合拔きの奴を相手にする事だな。

甚三 いま云つた大鳥毛の句が、どうも手前解せぬ。

みや こりやアお大名の頼兼さまを、高尾が振つてく振りつけた句ぢやわいな。

甚三 どうやらそれは、宮

ト思ひ入れあつて

其方と手前のやうなもの。

みや どうしてマア、わたしやあなたに大抵

ト思ひ入れあつて、ちやつと外の本を取つて見て

「口惜しくば、尋ね来て見よ松ヶ岡。」面白いなア。

トつんとしてゐる。

甚三 ハ、ア、色氣を思ひ切つたのぢやな。

ト本を見て

「自惚れが、惚れねば誰れも惚れ手なし。こゝらが滑稽ぢや。」

みや エ、憎らしい。

ト甚三郎へ思ひ入れ。文藏また本を見て

文藏 「木火土金水より先づ女房」……こいつは、籠より先に嬪アを持つ事だな。こいらが世話場の命

かい。お宮さん、お前は差づめ引越し女房。

みや どうして、わたしがやうな我まゝ者が、ぬしのやうな怖い殿さんに

文藏 そりやアほんの負け惜しみ。お互ひにまんざらでもない様子。

ト本を見て

「六阿彌陀、元木にまさる裏木あり。」川柳めは野暮でないやつ。

みや エ。

文藏 「三國の、廻しを取つた畜生め。」

トお宮の脊中を叩き

抱きつきなさい。

トお宮を突きやり、文藏、本を顔へ當てる。チャン、と唄になり、奥へ入る。この時、二階の簾上が

り、お初、様子を窺ひある。お宮こなしあつて

みや 申し殿さん、先刻の慮外は、あやまりましてこの通り。

ト柳樽の本を出す。誂らへの合ひ方、甚三郎これを見て

甚三 この通りとは。

みや 「合羽箱、どろくくとかしこまり。」

ト両手を突いてゐる。

甚三 ハ、ア、跡者の下座ぢやな。

トお宮、甚三郎の側へ出て

みや 御機嫌がお直りかえ。

ト扇で突く。

甚三 「紂王は、きやん立宗はむくが好き。其方は新子か。

みや 左様サ。

ト甚三郎、お宮を引寄せる。

オヤ、生娘ではあるまいし。

トお初これを見て腹を立て、いろくあつて

はつ そりやあんまりぢやわいなア。

トきつとなるを、徳兵衛探り出て、お初を引廻し

徳兵 これサ、それでは

ト後向きに隔てる。甚三郎恟りして

甚三 それではとは、不承知か。

みや どうして、ぬしの云ひなさんす事を

甚三 イ、ヤ……「丈長の、鉢巻き殿をやりこめる。」恐ろしい奴の。

みや エ、憎らしい、

ト甚三郎を抓り

勿體ない、ぬしは殿さん。

甚三 それも云はれぬ……「椎の木は、殿様よりは名が高し。」これでは閉口。

みや まだ疑ひなんして

トまた木を見て

「添はせてえ、おくんなんしと神頼み。」オヤ、吉原になつたね、  
甚三 アノ、眞實か。

みや アイ。

トお初堪へかれ

はつ アレ、あれぢやもの。

徳兵 尤もだ。

トちつと押へる。

みや アレ、どこやらで尤もと云ふわな。

甚三 互ひに惚れたをよく〜くに、尤もと思ふから。

みや そんなら、あなたも

甚三 「色といふ字は思案の阿蘭陀字。」

みや 御思案の外かえ。嬉しいね。

はつ モシ。

トまた行かうとするを引廻す。

甚宮 誰れやら二階に

ト二重舞臺へ上がり

甚三 思ひがけない春風に

みや 縁を結ぶの

甚三 柳樽。

みや わたしが點で

甚三 書抜きにならうかいやい。

ト兩人色模様のごなし。一面に簾下りる。お初、口惜しきごなしあつて

はつ 徳兵衛さん、爰放して下さんせ。わたしや腹が立つて〜、この身を捨て〜も

徳兵 成る程、女の身として、云ひ交した男を取られ、勤めの身でも腹が立たいで何とせう。先刻も頼

む、この徳兵衛は、お家の爲に殿様へ、不義者となつたではないか。爰の所を聞分けて、どうぞ  
辛抱してくれい。コレ、徳兵衛が、拜むわいやく〜。

ト手を合せて脇を拜むと、簾の内にて

甚三 ヤア、文藏の偽り者めが。

徳兵 あの聲は殿様。  
はつエ。

トまた思ひ入れ。徳兵衛簾へ手をかける。ハラリと下りる。合ひ方になり、二重舞臺の簾上がる。内に甚三郎、煙管を振上げるを、文藏とどめぬる。

文藏 只今も申し上げます申し譯、何卒とくと、お聞濟み下されませう。

ト奥にて

徳兵 遠山さま、殿様々々。

甚三 あの聲は徳兵衛。

文藏 親仁の呼ぶは

甚三 合點がゆかぬ。様子があらう。まづく。

ト落ちつきしこなし。徳兵衛、探りく出て来て、甚三郎の袖を捕へ、搔卷ゆゑ、それでないといふ思ひ入れ。

徳兵衛、手前に用があるか。

徳兵 モシ、暫く。

ト文藏の上下を探り、甚三郎と思ひ捕へる。文藏、違つたと云はれず、是非なくヤツと思ひ入れ。甚三郎奥へ入り、またお初、簾を上げて見る。途端に文藏顔見合せ、文藏ちやつと短檠の灯を吹消す。お初、獨臺の灯を吹き消し、窺ふ。

徳兵 モシ、殿、何方へもござらつしやるな。

ト時の鐘、蛙の聲、詠らへの合ひ方になり、徳兵衛思ひ入れあつて

殿には再び御家督遊ばされましたれど、御浪々の砌り、お初に迷はせ給ひしゆる、思し召し切らせ申さう爲、私しが、心にもないお初の客となり、鳥目を隠して女郎買ひも、お家の爲を思ひましての事。また折よくも、お宮と申す女郎が、あなたへ戀慕して、殿も又心を移されましたよつて、お初は愛想を盡かしましてござりまする。

ト思ひ入れ。文藏切なきこなし。此うち二階へお北出て

きた お宮さんはそこにか。灯の消えたこそ幸ひの面伏せ。

ト探り、お初を捕へる。お初黙つてゐる。徳兵衛これに聞き耳立てる。

わたしやお前に話があるわえ。先刻座敷で、お初が語つた「重井筒」、楽しみなうては勤まらずむけなうせくではなけれども、必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の間男同然で、思ひゆ

かぬもの、とは面白い文句の淨瑠璃。殿さんにはお初といふ、深い馴染があるではないかえ。それに聞けば、口がかゝつて揚干しになつたが腹が立つと云うて、アノ殿さんと

よもやさうではあるまいが、又お初にも、云うて聞かさにやならぬ事があるわいな。

トお初恟りして思ひ入れ。

徳兵 二階に餘所の意見といへど、元はみんな殿様より。君を思ふも身を思ふ、病氣勝なるこの徳兵衛養子合せにもらうた悴。殿様には御不請次手に、文藏に成り代りて、お聞きなされて下さりませ。

ト文藏ギツクリと思ひ入れ。

この程の不身持。親が事も思はずに、荒氣になつての喧嘩好き。一體彼奴が心づかず、早く人様にあやまる事をせず、念の足らないばかりに、餘所の喧嘩も大事に濟み濟ましせぬといふは不調法。以後をキツト嗜めやい……サア、こりやア文藏へ申す事。勿體ないあなた様。……サ、思ひは變らぬお客同士。

トお北これを聞いて

きた 御恩を思ふ徳兵衛さんの御意見。この淨瑠璃では、徳兵衛ゆるゑにお房、ではないお初に云うて聞

かす事。兄は悪者、それゆるゑにこそ、殿さんと縁を切らそと、あのやうに御意見申すも、皆お爲したが、ひよつと其やうな事はあるまい。殿さんさへ思ひ切れば、外に男はいくらもある。この頃の馴染なれど、外の子供衆とは違つて、わしや眞實に思つてゐて、豆腐取てこい、八百屋へ走れ、駕籠呼んでおぢや、掃き掃除。

徹兵 小さい時からお屋敷にて、お目をかけて下されたお出入り。

きた 戸棚の鍵まで預けしと、淨瑠璃ほどでもないけれど、どうした事か我が子のやうに

徳兵 勿體なくも、思ひは同じ忠と恩愛。

きた 嫌な意見もどうぞして

徳兵 殿様、悴。

きた お宮さん。

徳兵 聞いて下さりませ。

トよろしくこなし。此うち二階の後へお宮、茶立口へ甚三郎出かゝり、様子を聞いてゐる。お初、いろくこなしあつて、

はつ ハイ、おかみさんの御深切。わたしやいよく、

ト思はず聲を立てる。お北恟して  
きた ヤア、初か。

ト立上がる。途端に二階の簾、バラリと下りる。甚三郎ヒツシヤリ。文藏、徳兵衛の手を戴き、振り切り、ツイと花道へ行き、立ちどまり、思ひ入れ。合ひ方になり、直ぐに取つて返し、柴垣へ忍び、窺ふ。

徳兵 殿様には勿體ない、私しが手を取つて、御承知下されましたか。これにつけても忤が事、嫁の事二人の仲の悪いのも、心がりの病の元。思へば子ゆゑの鳥目の闇。

ト時の鐘になり、お北、ぶら提灯を持ち、出て来て

きた 徳兵衛さん、お歸りかえ。眞暗ぢや、お目にかけてやせう。

徳兵 仲間の者が、玉川が所に居る筈だから、マアあそこまで

きた わたしが送つて

徳兵 とほくと

きた 派手に一口、上方唄で

徳兵 裏から色に送られて

ト下座にて

いなば橋まで送らんと、夕暮時の花街がよひ。

トこの唄にてお北先に立ち、徳兵衛思案のこなし。とほくととして爪づくを、お北手を取りきた 酔うてぢやさうな。

ト徳兵衛を連れ、向うへ入る。文藏ソツと出て、跡を拜み

文藏 養子といへど親仁様の御深切、なか／＼仇には存じませぬ。四つ石の極印の、金の事にて思はずも、この頃の短氣に喧嘩口論は、若氣の心づかざるゆるゑ。また殿様より拜領の、この上下に免じて、心をも取直して、極印の二百兩を取上げますには、それだけの質草を

ト思案のこなし。奥、バタ／＼にてお初、甚三郎の胸ぐらを取り、出て来て

はつ 殿さん、聞へませぬ、聞へませぬわいなア。

甚三 こりや手前を何とする。

はつ わたしや何にも云ひませぬ。

ト懐より起證を出して

こりやお前より下さした起證。縁の切れ目は、カウ／＼。

ト起證を引裂く。甚三郎恟りして

甚三 なぜにそちや起證を破つたぞ。

はつ わたしが方から上げた起證も

ト甚三郎の懐へ手を突こみ、紙挟みより袋入りの鑑定書を引出すを、捕へようとして

甚三 コレ、何をする。外に大事の書附けがある。

はつ この起證も、カウ〜〜。

ト鑑定書を引裂く。甚三郎驚く。

女子の思ひが、有るものか無いものか。エ、。

トお初、破れを打ちつける。合ひ方になり、ツイと奥へ入る。甚三郎氣を揉み

甚三 コレ初、これには段々譯のある事。其方と手前と縁を切らさうと思つて、皆が種々の事。手前、

其方と縁は切らぬに、起證まで破るとは。腹が立たう、尤もぢや。

ト思ひ入れ。この時奥よりお宮、お衆、おさの、お倉、大小手燭を持ち、出て来て

みや 文藏さん、首尾よく参つて、お二人さんの起證まで破つて

文藏 これでは思し召し切らずばなりません。まいがな。

甚三 文藏、ようも宮に申しつけ、手前に思ひあるやうに見せ、床の内にて段々の云ひ譯。ようも〜

偽つたな。エ、。

ト腹を立ち、むしやぶりつかうとする。文藏とどめ、平伏して

文藏 モシ、殿様、親徳兵衛が御恩を思ひ、種々に心を盡しまして、お上下の間違ひにての御意見、及

ばすながら私しが、今日の計らひ。悪ざまに思し召し下されては、憚りながらお恨みに存じます

る。

甚三 ヤ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり

文藏 金兵衛と申す者に、用事あつて参りか、つて、承りますれば、只今お聞きの通り、親ども徳兵

衛が、お初の客となりましたも、あなた様へ愛想づかしを致させて、思ひ切らせ申さう偽。

みや また文藏さんは、この間からのわたしが色客。今日殿さんの揚げになつてゐるこそ幸ひ、斯う斯

うせいと頼ましやんすゆゑ、心にもないお轉婆事。いとしなけにお初さんに、取交した起證まで

破らせたも、あなたとお初さんの縁を切らせ申さうばつかりに、文藏さん親子の御苦勞でござん

す。お初さん、堪忍して下さんせえ。



ト甚三郎思ひ入れあつて

七九四

甚三 それ程までに徳兵衛親子が、善となり悪となり、思うてくれるは過分なれど、どうも君子二言なしの……それも起證が此やうに破れて

ト破れを取上げ、惜しさうに見て

「天罰起證文の事」。こりや手前の手跡。

トまた破れを取つて

「未來永々」。血が付いてある。これも手前のぢや。

ト鑑定書の破れを取つて

「唐李延年傳來たる四方出の香爐」

ト惘りして

この破れは、合點がゆかぬ。

文藏 エ、。

ト驚き、外の破れを取つて

「本金五十枚」

トお宮も破れを取つて

みや 「相違これなく候。文龜三年三月十八日」。

ト甚三郎また取つて

甚三 「宗祇判」。ヤアくくく、こりや香爐の鑑定書。

ト紙挟みより起證を出して見て

初が起證は爰にある。

文藏 そんなら起證を取違へて破つたのか。ヤアくく。

ト大きに惘りする。

甚三 ホイ。

トちつとなり、俯向く。

文藏 これでは香爐も埋れ木同然。

女皆 ほんに氣の毒な。

みや 文藏さん、どうしたらようござんせう。

ト甚三郎思ひ入れあつて氣を變へ

七九五

色一座梅椿

大南北全集

甚三 ハテ、大事な。鑑定書は當時の香所、滋家より取れば濟む……サア、もう歸らう。  
女皆 そんなら、わたしらがを送り申して。マアわつさりと一つ上がつて。

ト酒と肴を出す。

みや わたしや着替へて。

文藏 殿様には、この形では。

トお宮、包みを明けて見て

みや こりや殿さんのお小袖。

甚三 損料屋めが取違へたか。ドレ、それを

文藏 ハツ。

くめ 賑やかに、祭文なりと。

ト三味線を取上げる。大小入り「竹生島」の祭文になり、文藏お宮、甚三郎に着せる。

甚三 手前はよいから、宮も文藏も、もう行つて、しけれ〜。

文藏 これは又、怪しからぬ事を。

甚三 行かぬと手前、意見をきかぬぞ。

ト文藏つかへて

文藏 左様ならば

みや あの二階へ。

トお宮、文藏の手を取り、奥へ入る。直ぐに二階へ上がる。甚三郎トツクリと着て、大小を差し、二階を見て

甚三 手前は歸るぞ。

文藏 殿様ゆゑに今日は

甚三 互ひに立腹する事もあり

みや わたしが辛氣も

甚三 そこでゆるりと

文藏 御免下さりませう。

ト色めいたこなし。合ひ方になり、簾下りる。甚三郎思ひ入れあつて

甚三 あの宗祇の鑑定書が破れては  
女皆 エ。

甚三 小用を足しに。

七九八

トついと奥へ、皆々附いて入る。下座より九平次出て来て

九平 妹を連れて行つて、團右衛門さまへ上げれば、外へ賣るより金になる。それに徳兵衛めが支へこ  
さへ。したが、あれぢやア殿様の縁も切れたわえ。なんでも彼奴を

ト奥よりお初、剃刀を持ち、出て来て

はつ 浮世の義理にせばめられ、どうで添はれぬ殿様のゑ、取交したる起證を破つて、わたしやあの世  
へ。さうぢや。

ト死なうとするを、九平次とめて

九平 われを殺していゝものか。團右衛門さまへ連れて行つて金にする。来い。  
はつ エ、否ぢやわいなア。

九平 エ、面倒な。

ト引立てるを突きつける。騒ぎになり、立廻りに銚子杯を打ちつける。チョン／＼にて、道具廻  
る。

本舞臺、三間の間、一面の黒屏、松の立ち樹、真中に切り戸口。鳴子の札下げてあり、爰に仁太、頼  
かむりをして、塀際に立つてゐる。時の鐘にて道具とまる。

仁太 先刻見て置いた、香爐の箱へ入つた百兩、慥かに殿様が持つて歸るに違ひない。どうぞして捲あ  
けたいものだが。

トそこらを見廻す。向うより三、富士屋といふぶら提灯を持ち、出て来て

三 海へ行つて遅くなつたが、金兵衛さまはまだか。ドレ、鳴子を曳くべい。

ト本舞臺へ来て、鳴子の札を曳かうと伸上がる。仁太、内を覗かうとする。途端に切り戸口より甚三

郎ツイと出る。三、開きにあたり、「アイメ……」と云ひながら、ぶら提灯にて擲り廻す。立廻りに

て甚三郎爪づき、香爐の箱を落す。仁太、三の提灯を引ツたくる。三、立廻つて掴みつき、揉合つて

下座へ入る。甚三郎こなしあつて

甚三 皆々の意見もだし難けれど、初へ番うた詞が立たず。とくれかくれの其うちに、初が格氣に誤ま  
つて、破つた起證間違つて、大切な鑑定書が破れたれば、香爐があつても役に立たぬ。所詮鑑定  
書が無ければ、この身の仇と思ひ極め、わざと皆には嘆きなき體に致し、密かにこれへ抜けて來  
たも、一旦この身を蟄居して、これより直ぐに龜井戸の下屋敷へ……誰れぞ参らぬか、供は居ら

七九九

色一 座梅 椿

大南北全集

ぬか……オ、居らぬ筈ぢや。

ト思ひ入れあつて、そこらを探れる。下座より仁太、ぶら提灯を持ち出てくる。

仁太 ハテ、大東な。

ト合ひ方になり、甚三郎そこらを探し、香爐の箱を取り上げる。仁太見て思ひ入れあつて  
お供が無いさうだ。この提灯で送つて進ぜう。

甚三 それは大儀。

仁太 そして、お屋敷わえ。

甚三 龜井戸の下屋敷へ。

仁太 マア、尻でも端折つて行かつしやりませ。

甚三 よろしう致せ。

ト仁太、我が手拭にて甚三郎に頬かむりをさせ、おちよばからげにして

仁太 サア、行きやせう。

甚三 提灯やれ。

ト花道の角へ来る。此うち三、出て来て

ト取りにかゝるを仁太、見事に取つて投げる。

三 その提灯を

仁太 ソレ、ぬかるみ。

ト提灯を差出す。チヨンと木の頭。

甚三 承知。

トよろしく、ひやうし

幕

ト幕の外、騒ぎになり、仁太と甚三郎、向うへ入る。時の鐘のツナギ、引返し。

本舞臺、三間の間、向う黒幕、一面の藪、すべて中川筋の體。爰に蕎麥屋、蕎麥を拵へてゐる。  
十太、船頭にて、蕎麥を食つてゐる。禪のツトメにて幕明く。

そばお前は夜通しに、どこへ行かつしやる。

十太 わしやア中川の船頭だが、今日は晝から飲んで、剛氣に酔つた。そこで蕎麥を食ふのだわえ。  
そばようごんす。小言を云はずと、蕎麥を食はつしやりませ。

十太 オ、食ふがどうしたえ。

ト蕎麥を食ひながら、そこへ眠りこける。

そば ハテサテ、剛氣に酔つて、夢中で蕎麥を食はつしやるワ。いまくしい。此奴は食ひ逃げではな  
くつて、食ひ寢だわえ。

ト蕎麥の荷を擔ぎ上げ

そばイ〜

ト向うへ入る。十太、大いびきにて稻村の蔭でころげる。ゴンと時の鐘、獨吟のメリヤスになり、向  
うより仁太、提灯を持ち、甚三郎、ブラリ〜と出て来て、花道にて

甚三 まだ龜井戸までは餘程あるか。

仁太 夜の道といふものは、はかのゆかないものサ。

甚三 爰はどござや。

ト仁太そこらを見廻し

仁太 何だか眞暗がりて薄氣味の悪い。どうやら地獄の釜屋堀か。

甚三 ハテ、心よらない所ぢやな。

ト又メリヤスになり、東の揚げ幕より千日参りの坊主、鉦を叩き、出て来て、本舞臺より花道へかゝ

る。仁太行きあひ

仁太 坊さん、早く参らつしやるが、淺草の觀音様かえ。

坊主 イエ、方樂新田の焼場へ回向に。

ト甚三郎、腹の痛きこなしにて

甚三 こりや、どう致したか腹鹽梅が

仁太 エ。

坊主 南無阿彌陀佛々々々々々。

ト鉦を叩き、向うへ入る。

仁太 ツイ地獄の釜屋堀と口が辻つたら、焼場へ行つた回向の坊主。これを思へば、庚申塚は六道の辻  
どうで三途の中川筋。

甚三 ハテ、いまはしい事。

ト又メリヤスになり、甚三郎仁太、本舞臺へ来る。また東の揚げ幕より、白無垢白帯、綿をかむりし  
女出て来て、花道の角にて行きあふ。仁太惻りして提灯を消し

仁太 アレ、幽霊だ〜。

ト逃げる。甚三郎見て

甚三 仰山な。白無垢を着た女ぢやな。

ト女も惘りして

女 骨あけに参りまして歸ります者。どうぞお助けなされて下さりませ。

ト慄へる。

甚三 何も構ひはせぬ。

女 でも、お侍ひ様の、どうやらすツば抜き。

甚三 行けく。

女 劍の山を、オ、怖々。

ト向うへ逃げて入る。

甚三 變つた辻占。

トまた腹の苦しきこなしにて

これは又ひどく腹が痛んで来た。溜飲のやうでもあり

仁太 どうさつしやりましたく。

ト甚三郎の側へ探りよつて、脊を撫つて介抱する。

甚三 グツと腹の力を押して

仁太 合點だく。

ト「めたといふ思ひ入れにて腰から腹を撫りながら、懐へ手を入れて、香爐の箱を取らうとする。甚三郎押へ

甚三 こりや何をする。しつかりと介抱を

トいろく苦しみ

この苦しみでは、なかく歩行は叶はぬ。何を飲んで身に當つたか。ア、

ト苦しむ。仁太箱を持つて行かうとする。甚三郎、その手を取つて

コリヤ、介抱せぬか。

仁太 エ、面倒な。

ト蕎麥屋の置いて行つた薪ぎつぽを探り取つて甚三郎をぶんのめす。「ワン」と倒れる。三味線入り、禪のツトメになり、甚三郎、身動きならぬこなしにて

甚三 そちや、これまで介抱してくれたでないか。

仁太 欲しいから、ぶんのめしたのだ。

甚三 欲しいとは、

仁太 欲しい。

甚三 イヤサ何を。

仁太 これが欲しい。

トぶつてかゝるを、甚三郎苦しみながら刀を抜き、切り拂ふ。仁太飛びのき  
抜いたなく。

甚三 何か悪しき物を飲み合せ、腹の苦しみ、手足の痺れ、自由叶はぬ身なれども、狼藉いたせば手前も武士。其方を一刀に

ト刀を杖に立たうとして、よろめきながら無性に切りまくる。仁太逃げ廻りながら、ト刀を叩き落す。甚三郎直さま差添を抜いて切りつけうとして、立廻り、柳の樹へ切りこみ、差添抜けぬこなしにて口惜しきこなし。

仁太 仲町から爰まで来たも、見かぢつた懐の物。

甚三 ムウ、これか。こりや金ではないワ。

仁太 隠しやアがるな。

トそこにある庭下駄を取つて打たうとする。甚三郎苦しみ、バツタリ落入る。ゴンと時の鐘。

なんだ此奴は、どうしやアがつた。

ト探り見て、恟りして

こりやアどうだ。どこもかも冷たくなつた。此奴は骨折らずにくたばつたが、なんでも毒でも食つたと見えるわえ。

ト甚三郎の懐より香爐の箱を出して、探り見て驚き

こりやア何だ。金だと思つたら香爐だ。さうだ。大方、墓場にある線香立ての香爐だんべい。いまくしい。

ト稻村の方へ抛る。これにて香爐、寝てゐる十太にあたる。

十太 アイタ、、、、。

ト起上がらうとして、よろめく。これにて仁太、下の方へ小隠れる。禪のツトメになり、東の花道より多四郎、序幕の形、げつちにて、行徳徳願寺といふ小田原提灯を持ち、出て来て、本舞臺より花道際まで来る。向うより七五郎、序幕の形、頬かむり、咬へ煙管にて出て来て

七五 早く今井まで行きたいものだが。

ト多四郎と行きあひ、惻りして

わりやア多四郎だな。

多四 うぬを疾から尋ねてゐるだが、よい所で逢うたわえ。

七五 おらア悪い所で逢うたと思ふ。

多四 さういふからは覚えがあらう。遠山さまの重器、本金五十枚の四方出の袖香爐の鑑定書、それを

寄越せ。

七五 べら坊め、おらア知らないワ。

ト行かうとするを引ッ捕へ

多四 知らないといつて、香爐の鑑定書、取返さずに置くものか。マア、うぬが懐を

ト懐へ手を突こみ、鼻紙を引出す。

七五 それを遣つてたまるものか。

ト禪のツトメになり、兩人立廻りにて鼻紙を落とす。

多四 寄越しやアがれ。

七五 南無三、書附けを落したわえ。

多四 ナニ鑑定書を

ト兩人立廻りの中へ、十太、ノック出て、三人立廻りにて、十太は香爐を持ち、下座へ入る。七

五郎、鼻紙を取つて書附けを落とし、向うへ駆け出す。多四郎、追ひかけ入る。仁太、香爐と聞いて惻

りして

仁太 いまくしいわえく。墓場の線香立てだと思つて、ぶッ抛つたが、あの書附けの事を思やア、

大名の持つてゐた香爐だから、もしや本金とやらで、五十枚の香爐か。それだと猶腹が立つわい

腹が立つわい。

トそこら中を尋ね

サアく、無いワく。エ、いまくしい。何にしろ、書附けを落した様子。大方爰らにあん

べい。

ト書附けを探り拾ひ取つて

よし、これからこれを持つて隨徳寺とせう。さうだ。

ト書附けを懐申して向うへかゝる。時の鐘にて、向うより三重襷の提灯を附けたる四つ手駕籠を擔



ぎ、駕籠昇き出てくる。仁太、花道にて行きあひ、思ひ入れあつて摺れ違ひ、駕籠は舞臺へ来て、死骸を見て、恟りして

駕昇 ヤア、人が死んでゐるく。

ト騒ぎ、駕籠を捨て、逃げて入る。仁太見返り

仁太 べら坊め。

トふり向く。チョン。

恟りしたわい。

トきざみにて、禪のツトメになり、ひやうし

ト仁太向うへ入る。シヤギリ。

幕

### 四幕目

### 平野町の場

役名——平野町の徳兵衛、木屋文藏。徳兵衛妹、お賤。十右衛門女房、おりく。半ぎらのお鶴

下女、おふき。同、お米。丁稚、三太。同、寅松。同、徳松。町人、九兵衛。廻し男、八兵衛。

盗人、遠州の九助。

本舞臺、三間の間、上の方障子、その前に机の上に甲斐絹の風呂敷に前幕の上下を飾り、結構なる膳椀にて薩膳据ゑあり、下の方、誂らへの黒格子、軒に初午の提灯吊し、門口の外、出入りの路地口、爰にも長屋中といふ行燈。すべて平野町木屋の宅、初午の鳴り物にて幕明く。  
ト爰におふき、お米、下女の體。布子、花色股引の三太、初午の繪馬と延喜の百兩を持つてゐるを、寅松、丁稚にて引附け、喧嘩してゐる。皆々捨ぜりふにて留めてゐる。

ふき これはしたり、また朋輩喧嘩か。

よね 旦那様へ聞へたら、大抵な事ぢやあるまいぞえ。

兩人 靜かになさんせく。

三太 この三太丁稚が差出をしたと、なぜ旦那へ云ひつけるといふのだえ。

寅松 云はいでは。若旦那のお使ひに出て、此やうな繪馬や、延喜の百兩を持ち歩いて、なぜ稻荷講を集めて歩くのだ。それで旦那へこの通りを、云はうといふのだが何とした。

三太 それが悪いわえ。打ッちやつて置きやアがれ。

寅松 まだそんな悪態を

よねハテ、あの三どのには構はつしやるな。

ふきしたが、そりやこなさんが悪い。なぜお使ひ先で、稻荷講を集めるのぢや。ちと嗜まんせ。年にも恥ぢて

三太 ナ二年に恥ぢるものだ。訥子はおらが親方だもの。

ふき まだ減らず口を

寅松 それく、人をひようらかしますわな。延喜の百兩も、その繪馬も、寄越さつしやい。

三太 エ、否だ。

ト争ひある。矢張り初午の鳴り物にて、向うより八兵衛、やつし股引、廻し男にて、スタく出て來り、門口を窺ひ

八兵 モシく、若旦那様はお留守かえ。

ふき アイ、文藏さんかえ。

八兵 左様でござります。

ふき アイ、今までお内であつたが

トおろく見廻す。

八兵 ヘエ、お留守かな。

ト寅松を見つけ

コレ、兄さんく。

ト招く。寅松呑みこみ

寅松 アノわしか。

ト門口へ出る。八兵衛、ソツと文を出し

八兵 コレ、この文は、お宮さんから、急に若旦那へ届けるのだ。ソツと頼みます。

寅松 慥かに受取りました。

八兵 兄いどの、頼みましたよ。

トまた鳴り物になり、引返して入る。寅松、文を懐へ入れ、内へ入る。おふきチロく見て

ふき コレ、寅松どの、ありや何處のお人ぢや。そしてこなさん、いま門口で、何を受取らんしたのぢや。

トこのあたりより障子を明け、お賤窺うてゐる。

寅松 サ、こりやアノ

トうぢくして

オ、それく、あの清住町の謠のお師匠様から、旦那へ謠講の事について、来たお手紙ぢやわいの。

ふき そのお手紙なら、見せなさんせ。

寅松 イエく、若旦那へ、こりやわしが、渡し申すわいの。

ふき マアく、ちやつと見せなさんせ。

寅松 ハテ、わしがあけるわいの。

トおふき、手紙を見ようと、寅松が懐より引出すを、捨てりふにて見せまいとする。お米もこの中へ入り留める事。トおふき、手紙を取つて

ふき 「文藏さまへ、みや」……さてこそな。これをアノお賤さまへ

ト行かうとして、フツとお賤と顔見合せ

ヤ、お賤さまかえ。

しづ 其方衆は、何をマア其やうに

ふき モシく、お聞きなされませ。いま此やうな文を、持つて来た者がござりますから、そこでわたしが取つて置きました。ちやつと御覽じませ。

寅松 ア、コレ、それは

ト思ひ入れ。おふきは文をお賤に渡す。お賤は宛名も見ずに、こなしあつて

しづ これはしたり、ふきとした事が。どこからどこへ来た文やら、それを何でわしが見たとて。コレ

寅松、其方の届けるお方へ、お渡し申しや。

ト文を投げる。寅松取つて

寅松 ハイ、それで私も落ちつきました。

ふき エ、お氣の弱いお賤さま、何であらうと其マア文を、御覽じてもようござりまするわいな。

トその時障子の内より文藏出かゝりある。

しづ ハテ、外のお方へ来た文ではない。文藏さまへどこやらから、これ見よがしの女子の文。なんの見るには及ばぬ事。ゆくく女夫になつたとて、末の遂けぬ事ならば、いつそ今から。

文藏 愛想盡かさば盡かす氣で、この入り聲の文藏を、杯もせぬ其うちに、こりや長棹とやる氣だの。しづ エ、お前は文藏さま、長棹とやらは、何の事でござんすえ。

文藏 長棹とは、船で使ふ長い竹サ。實に此方は鼻の下の、長い竹ではなうて大だわけ……コレ、寅松、その文を寄越せ。

寅松 ハイ。

トうぢくする。

文藏 エ、寄越せと云ふに。

ト文を取つて

コレ、寅松、われは今におれが出る時、供に連れて行くぞ。支度をして待つてゐろ。

寅松 ハイ。

ト氣の毒な思ひ入れ。

文藏 エ、早く行つて、髪でも結つて來ないか。

寅松 ハイ、畏りました。

ト門口へ出て

髪結ひどんは居りませんかえ。

ト向うへ入る。お賤思ひ入れあつて

しづ モシ、文藏さん、何ぢややら此あひだは、わたしの影さへ見なさんと、耳にかゝるねすり言。

わたしへの當りでござんすか。仰しやる事があるならば、きつぱりと仰しやりませいな。

文藏 ハテ、きつぱりと云はれぬが、養子の悲しさ。祝言はせぬが、末々こなたと養子合せ。文藏は小

糠三合、お賤どのは實家の子。

しづ イエ、家の子ぢやと仰しやつても、わたしも矢ッ張り他家の娘、四つの年にお内へ養子、御

恩になつても女子では、家は立ちませぬ。それよりはお前さんは、馴染んでござんす藝者さんと

一つになつて木屋のお内を

文藏 コレ、さう云ふのが、こなさんの詞に針があるぞえ。

しづ なんの針がござんせう。わたしや眞實の所を申しまするわいな。

文藏 イエ、この頃はこなさん、氣儘になつたよ。氣儘に。

しづ 何がわたしが氣隨氣儘を申しました。お前こそ何ぞといふと

文藏 どうしました。何を云ひました。

ふき ハテ、ようござりますわいな。

しづ イエ、云うても大事な事ぢやわいの。

よね お鎮まりなされませいな。

ト捨てりふにて留める。この時奥より徳兵衛出て来り、この中へ入り

徳兵 これサ、見世先で、妹も文藏も、近所へ對して外聞が悪い。マア、静かにしやいの。

文藏 イエ、私しは何も申す事はござりませぬが、モシ、親仁様、お前も御存じの、あの仲町の宮が事から起りまして

徳兵 エ、あの藝者の事から。コレ妹、ありやおれがよう知つてゐる藝者ぢや程に、必ず、格氣がましい事を

しづ イエ、何も格氣は致しませぬが、今も今とて先様から文が来たのを、わたしが何ぞと云ひもせぬのに、様々な事を云うて。

文藏 ハテ、この文は、嫌味のある文ぢやアないよ。

しづ 色氣があらうがあるまいが、それをわたしや、決して格氣は致しませぬわいな。

ふき エ、お賤さま、格氣をなされませいな。若旦那は仲町の天満屋で、あのお宮さんとやらいふ藝者さんの

徳兵 これサ、わいらも側から其やうに、役にも立たぬ事を煽て散らして……コレ、妹、今日ばかり

でもないぞや。去年の暮にお屋敷を下がつてから、尼になりたいの、イヤ坊主になりたいのと、おぬしが願ひ。それをどうぞ止めさせやうと、十右衛門の弟、爰にゐる文藏を、養子合せに貰うたも、家を譲つて徳兵衛は、樂に暮らさうおれが願ひ。おぬしもおれに義理を思は、氣隨氣儘をやめにして、爰にゐる文藏と、ならう事なら祝言して

しづ イエ、そりや御免なされて下さりませ。わたしがあなたを、嫌ひまするといふではなし、わたしや一生、男を持たぬ、願籠めを致しました程に、どうぞ只今までお勤め申したお屋敷へ、御奉公にあけて下さりませ。

文藏 これサ、お賤どの、こなさん、わしを嫌ひはせぬと云はしつても、一生男は持ちませぬ、又お屋敷へ奉公にあけてくれとの、願ひが矢ッ張り嫌うた證據。この文藏こそお内を出まして、兄の所へ

ト立上がる。

ふき ア、モシ、お待ち遊ばしませいな。

文藏 イヤ、留めるなく。わしこそ入り鞆。出た跡では好いた男と

しづ エ、そりやお前さんの事ぢやわいな。好いたお方があればこそ、藝者さんからその文が

徳兵 ハテ、若い者ぢや、遊び先から文も来いでは。それほど疑がやるなら、文藏、その文を妹に見せてやりやいの。

文藏 サ、見せましても大事はござりませぬが、内には香爐の二百兩、極印のある金を、あの質屋から取戻したかと、宮が尋ねの

徳兵 ナニ、極印の二百兩とは。

文藏 サ、極印の……どうで極意は私しは、お内を出さばなりますまいよ。

徳兵 そりや何で。

文藏 ハテ、お賤どのに嫌はれましたから。

しづ イエ、わたしや袖には致しませぬが、お前こそその文を、見せさんせぬが、矢ッ張りわたしをお嫌ひなされて

徳兵 これはしたり、二人が二人、イヤお前が嫌うた、イ、ヤこなたが嫌つたのと、いつまで云つても同じ事だ。取分けて文藏は、コレ、コレ、お米、そこにあるお上下を持つて来い。

よね ハイ、ハイ、

ト障子の方に飾りある前幕の上下を持つて来る。徳兵衛取つて

徳兵 コレ文藏。このお上下は仲町で、殿甚三郎さまより其方が拜領。それといふも、十右衛門の所から、おぬしが持参の二百兩、その金が殿様の、お役に立つて香爐の質請け、御前の御意に叶うた

文藏。その殿様のお行くへも、今日も知れぬと聞いたゆゑ、お身に恙のないやうに、又は御恩のあるお方と、アレあの通りに陰膳まで。

文藏 サ、それ程までに、御恩を思ふ殿様の、今にお行くへ知れぬのも、もしも香爐を質請けの、金の事から、ひよつと又

徳兵 コレ、あの金は、おぬしが持参の二百兩、それがどうした。

文藏 サ、その金がこの身の幸ひ、殿のお褒めのお詞に、それなるお召しのお上下、

徳兵 拜領の文藏は、冥加もない仕合せ者。おぬしが光りでおれまでも、お出入り仲間で肩身が廣い。

コレ、十右衛門の所へ歸るといふ事は、必ず云ひ出してくりやるなよ。

文藏 そりやア有り難うござりますが、何を申すも家の子の、お賤どのが

しづ イエ、わたしにお構ひなされますな。お屋敷の御奉公が致したいことは、こりや眞實わたしが願ひでござんす。決して文藏さんを嫌うて申す

徳兵 サ、嫌はぬものなら、折角下がつた屋敷勤め、また御奉公に上がる事は

しづ それぢやと申して、こりやわたしが願ひでござりまする。

徳兵 ハテマアてまへも、情の剛い。

ト爰にて暮れ六つの鐘鳴る。

ふき オヤ／＼、もう暮れ六つだ。三太どの、行燈ともさんせ。

三太 アイ／＼。

ト障子の間より丸行燈を灯し来る。

徳兵 ア、もう暮れるか。また例の俄盲目にならねばなるまい。コレ、妹も文藏も、眼病のおれが

願ひだ。何事もおれがコレ、鳥目にめで、

ト思ひ入れ。

文蔵 さう仰しやれば私しは、どうなりとも。

徳兵 妹も智慧が

しづ アイ。イ、エ、わたしやどう仰しやつても

徳兵 氣随氣儘を

しづ 兄さん、堪忍して下さいませ。

徳兵 エ、勝手にしろよ。

ト唄になり、徳兵衛腹立し思ひ入れ。お賤もツンとして捨ぜりふ。おふき、お米、差寄つてなだめ

る。この唄をかり、向うよりおりく、袖頭巾、前帯、女房の拵へ。供の男一人、葛飾といふ小提灯を

持ち出て来り、門口へ来る。路地により若い者出て、路地の行燈へ灯をともし入る。おりく、こなし

あつて

りく コレ長八、ちつて隙が取らうほどに、其方はアノ御勝手へ行て待つてたも。

供男 ハイ／＼。畏りました。

ト提灯を持ち、路地へ入る。

りく ハイ、りくでござりまする。御免遊ばされませ。

ト内へ入る。

よね ヤ、あなたは十右衛門さまのお内儀さま。

徳兵 おりくどのか。

文蔵 姉御ぢやアござらぬか。

りく オ、文蔵どのかえ。

徳兵 夜中に、ようござりました。サ、平にあれへ。  
りく ハイ、御免なされませ。

ト行かうとして

お前はお賤さまかえ。

しづ ハイ、左様でござりまする。

りく これはマア、お噂ばかりで、お初にお目にかゝりました。何かとマア、連合ひの弟御文藏どのが

文藏 エヘンくく。

ト咳にて、云ふなとこなし。お賤、モサくする。おりく、合點のゆかね思ひ入れ、徳兵衛氣の毒なる様子にて

徳兵 コレく、文藏 折角おりくどのがござつて、話しもあらうが、おれが代りに、あの永堀町まで  
行つてくりやれ。夜に入つちやア皆目だ。モシ、お内儀、聞きなさいまし、この頃鳥目を煩らひ  
まするよ。

りく エ、御眼病かえ。そりやマア、御不自由でござりませう。コレ、文藏どの、お前、氣を付けて  
あけなさんせえ。モシ、お賤さん、ほんにお目にかゝるは初めてぢやが、よい御器量ぢやわいな。

ホ、い、い。

文藏 モシ、永堀町は、會所へ参りまするのかえ。

徳兵 オ、今夜はいつもの参會、おれが行くのだが、この眼病ぢやア行けまい。代りにおぬし、行つ  
てくりやれ。

文藏 心得ました。モシ姉御、話しもありますが、わしは親仁さんの名代に、會所まで行つて來ます。  
ゆるりと話してござりませ。

りく ほんに、わたしも、こなさんには少と用もあつて……アイヤ、外の事でもないが、この頃は俄に  
こなさん、氣隨氣儘を

ト思ひ入れあり

サ、さういふ噂を聞いたゆゑ、こちの人が名代に、わしに行つて、弟が心意氣も聞いた上、あの  
お賤さんにも、物事をようお頼み申して來やと、十右衛門どの、名代ながら、徳兵衛さま、わざ  
わざと参りましたわいな。

徳兵 それは御苦勞。折角のお出でながら、文藏は、よんどころなしの名代に、やらにやアなりませぬ  
が、マアく、ゆるりと話してござりませ。其うちには文藏も、ツイ行つて來ませう。コレ三太、



提灯ちやうちんを持つて附ついて行いけ。

文藏ぶんざう イエいく、提灯ちやうちんには及およびませぬ。

ト此このうち三太さんた、延喜えんぎの百兩ひゃくらうを手玉てだまに取とつてゐる。

徳兵とくべい イヤいく、暮くれたではないか。提灯ちやうちんを持つて行いかつしやれ。

文藏ぶんざう イい、エえ、まだようござります。

ト門口かどぐちへ出でて

左様さやうなら私わたくしは、行いつて参まゐりますが、コレ、お賤しんどの、必かなずこの文まを味あじに思おもはぬがよい。ハテ、おれも去年きよねんやうくと、不思議ふしぎな縁えんでの養子やし合せ、持参ちさんもわづか二百兩にひゃくらう、殿とののお役やくに立たつとはいへど、兄あに十衛門じゅうゑもんから添そへて寄越よこした金かねなれば、慥たしかお觸ふれの四よつ石いしの

ト云いはうとする。

徳兵とくべい ナニ四よつ石いし。

文藏ぶんざう アイいヤや、四よつ前まへには歸かへりませうよ。

りく行いつてござんせ。

文藏ぶんざう アイい。姉御あねご、話はなしてござりませ。

ト唄うた、時ときの鐘かねにて、思おもひ入れあり、向むかうへ入いる。

りくアあ、暗くらい晩ばんぢやになア。

徳兵とくべい モシ、提灯ちやうちんを持つて行いきましたらうね。

三太さんた イエいく、若旦那わかだんな様さまはお一人ひとりで

徳兵とくべい 大おほだわけめ。附ついてうせぬか。

ト三太さんたうるたへて、延喜えんぎの百兩ひゃくらうばかり持もち、一散さんに向むかうへ入いる。

ふきエえ、子供こどもといふものは、あれほど大旦那おほだんな様さまが、提灯ちやうちんをと仰おつしやつたに

ト小箱こはこ提灯ちやうちんを、こらにあるを見みて

オヤおく、怪けしからぬ。矢やッ張はり爰こゝに提灯ちやうちんか

徳兵とくべい 持もつてうせぬか。エえ、あの丁稚でうぢめが。

ト氣きをいらち、思おもひ入れ。

ふきイエいく、まだそこらに居ゐりませう。コレ、三太さんたどの、コレ、提灯ちやうちんがあるわいなう。

ト初午はつごまの雛子ひなこにて、おふき叫さけびながら向むかうへ駈かけて入いる。

しづモシしく、兄あにさん、どうぞわたしを、今日けふも願ねがうたお屋敷やしよへ、今宵こよひあけて下くださんせ。

徳兵 すりや、譬への壁に馬を乗りかけたやうに、今から屋敷へあがりたいといふのか。  
しづ さうぢやわいな。

徳兵 勝手にしろく。もうく妹を持つたとは思はぬ。サ、今から行けく。

トお賤を外の方へ突きやる。

よね ア、モシ、左様になされましたは。

徳兵 ハテ、捨て置けく。これはお内儀、折悪う御挨拶もろくくりに

りく イエく、お構ひなされますな。ぢやが、こりやお前さん、よくくな事で……コレ、お賤さん、兄御さんにお氣を揉ませ申しては

徳兵 イエモウ、この間は取分けて、氣隨氣儘に

りく アイ、その様子も承りまして、それゆゑわざく参りましたも、短氣になつた文藏どの、又はお賤さんの心意氣も、聞かうため。お前も御存じの通り、文藏どののは、わたしが連合ひ、十右衛門の弟御、去年の冬、ふとした事で外手から、預かり金の三百兩……アイヤ、無盡に當つたあの金を、附けてお内へ賀養子、一つとお前の氣に入らぬ

しづ ア、モシ、決してわたしや氣に入らぬの何のと、さうした事ぢやござんせぬ。これには段々

りく サ、譯が無うてはならぬ事。そこは女子は女子同士。モシ、徳兵衛さん、お賤さんの事は、わたしにお任せなされませいな。

徳兵 それ程お前が深切に、云うて下さる事ならば、いづれよろしう

りく マアく、お任せなされませいな。

しづ モシ、おりくさん、お初にお目にかつたお前、あなたの方に縁のある、文藏さまを

りく ハテ、氣遣ひしなさんすな。わたしや野暮にもしなさんせ、行き渡つたこちの人、まんざらな事

もしやんすまい。モシ、徳兵衛さん、左様ぢやござんせぬかえ。

徳兵 成る程、あの十右衛門どのに連れ添ふこなさん、妹が事を頼まばとて、よもや味方見苦しい

ト思ひ入れあり

そんならお内儀、頼みました。

りく 必ず御苦勞になされますな。

徳兵 忝うござります。コレ、米や、白魚でも取りにやりや。

よね ハイ、お吸ひ物など拵へませうわいな。

りく イエく、お構ひなされますな。

徳兵 ハテ、春になつて初めてぢや。わざつと箸を  
りくまた参じまするわいな。

徳兵 ハテ、有り合せた寒玉子。ほんに、獨活の取つたのがあつたか知らぬ。

ト唄になり、徳兵衛、鳥目の思ひ入れ、お米介抱して、障子の内へ入る。あと合ひ方。お賤、手持ち  
なう思ひ入れ。おりく差寄り

りく モシ、お賤さん。今宵わたしが参つたは、あの文藏どのがこの間、短氣になつてお前との、仲が  
悪いといふ噂。ア、そりや困つたものぢや、女夫にならぬ前方に、互ひに仲が悪うてはと、十  
右衛門どのも、いかう案じてゐらるゝゆゑ、イエ、そりやわたしが行って、これまでお目には  
かゝらねど、お賤さんに逢うて、文藏どの、事も、詳しうわたしが頼みましたと、来て見たとこ  
ろが、却つて今ではお前の事を。モシ、お賤さん、女子同士のわたしぢや程に、必ず隠しなさん  
すな。お前が其やうに、男を持ちともないと云ひなさんすは、こりやてつきりお屋敷に、御奉公  
の其うちに、女夫約束しなさんした、外に男がござんせうがな。

トお賤恥かしさうに

しづ おりくさん、お前が其やうに云うて下さんすりや、成る程わたしや

ト思ひ入れ。

りく ハテ、恥かしい事はござんせぬ。ちやつとわたしに話しなさんせいな。誰れしも有る事ぢやわい  
な。

しづ アイ、さう仰しやれば、何をお隠し申ませう。御奉公の其うちに、ふつと見染めて末々は、こ  
のお方なら女夫にと、思つたお方が……オ、恥かし。

りく さうでござんせう。

しづ したが、現在養子合せの文藏さん、その兄御様十右衛門さんの、お顔は知らねど、今にもお聞き  
なさんしたら、弟を嫌ふわたしのゆゑ、お腹立ちもあらうし、わたしや、怖うてく。

りく ハテ、その位な事は面々に覚えのある事、身につまされて、無理な事とは思はねど、してマア、  
先のお身はえ。

しづ サ、そのお方の、お名も存じて居るけれど、そりやお屋敷に奉公なされてござんす時、今は町家  
に住居して

りく して、その所はえ。

しづ 存じませぬわいなア。

りくエ、お前、知らぬのかいな。  
 しづアイ、この程、思ひもよらぬ所でナ、そのお方にお目にか、つたわいな。  
 りくエ、逢ひなさんしたかえ。その時又、なぜに聞きなさんせぬぞく。

しづ その時も又、折悪う月に叢雲、あたりの人目、さりながら、これをわたしに下さんした、この折本の主さんに、この程逢ったその砌り、嬉しいあまりにツイ恥かしい、たつた一度。

ト恥がしいこなし。せりふの内、守の中より折り本の花曆を出す。この時外の書き物も落ちかゝる。  
 おりく、本を取つて

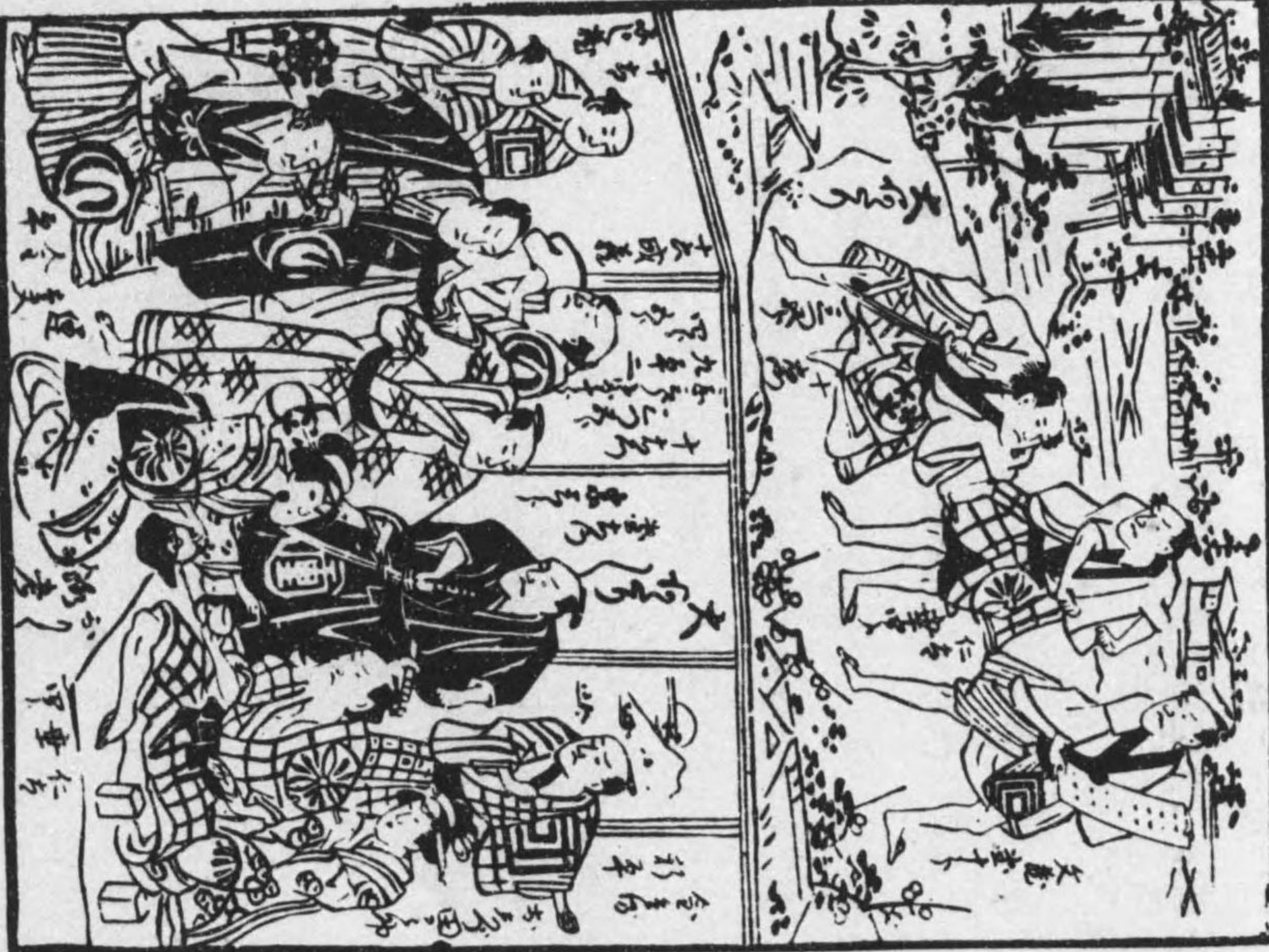
りくまだしもお前、そりや働きをしなさんした。ホ、、、、、ア、こりやコレ花曆ぢやござんせぬか。アノ、これを先のお方が

しづ アイ、大事に持つて居りまするわいな。

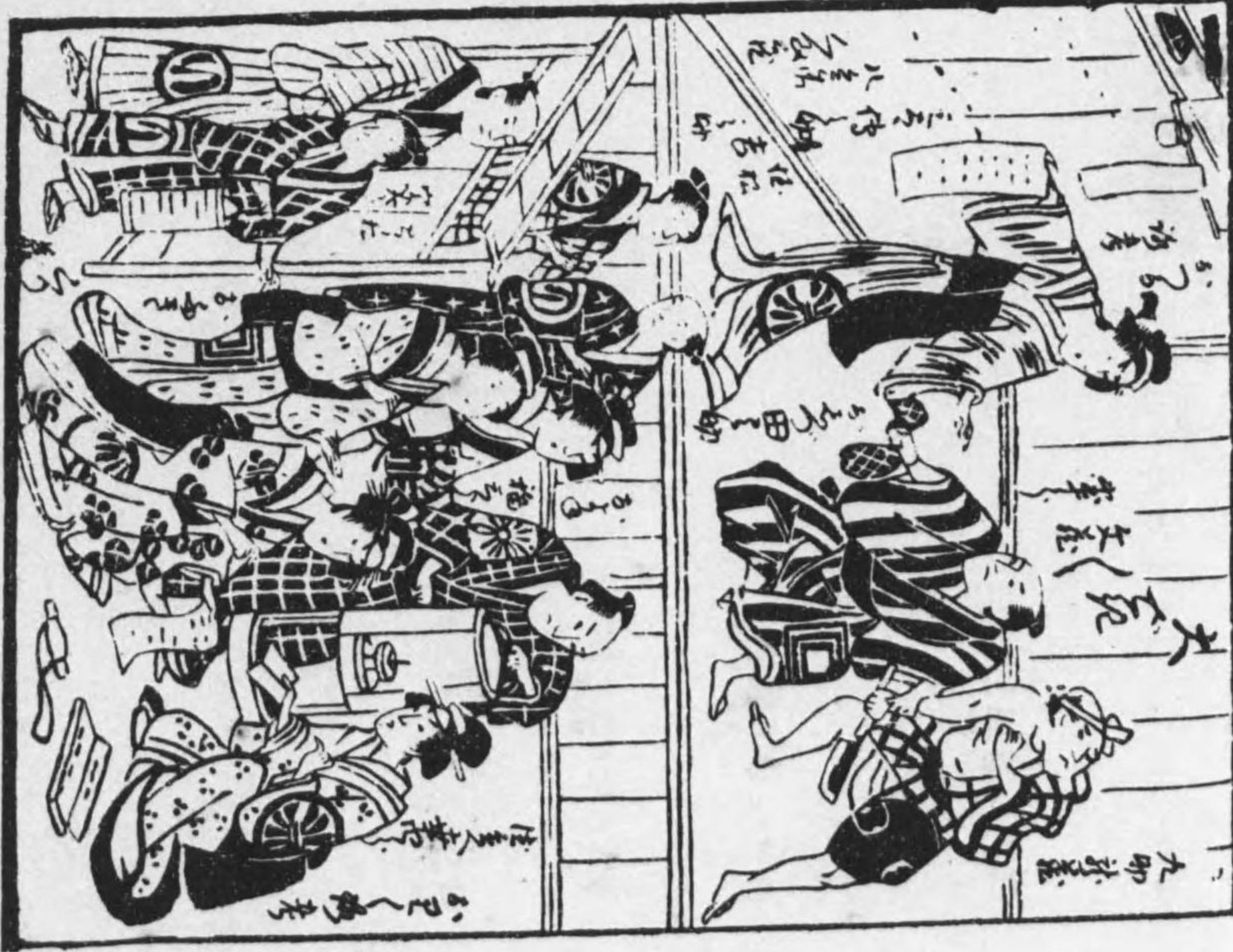
りく モシ、お賤さん、聞けばお前も徳兵衛さんとは、違うた兄弟といふ噂。してマア實の親御さんは今では音信不通かえ。

しづ サ、その父さんには二つの年に別れ、身寄りの方にかゝり人。四つの年に爰のお内へ、それから屋敷の御奉公。母さんはその砌りお果てなされ、親類とても無い身の上。姉さん一人ありとはい

七 暮 大 切



八 暮 大 切



へど、小さい時に別れたゆゑ

ト此（この）せりふの内、おりに思ひ入れあつて

りく モシく、お賤さん、そんならお前は二つの年に、父さんに生別れと云ひなさんすが、その父さん

んが、もしやお前に、親御の家名實名を

しづ 守に書いた生れ年月、しかも在所は梅澤の

りく エ、アノ梅澤の生れとあれば、その父さんは醫道の世渡り、苗字は尾崎

しづ アイ、昌庵娘と書いた書き物。

りく エ。わたしも爰に父さんの、今の形見のこの書き物。

しづ エ。

ト兩人守の中より年月の書き物を出し、互ひに取替へ見て

りく 千葉の家中、尾崎昌庵娘 お賤

しづ おりくさんは實の姉さん。思ひがけない

りく 變つた縁で

ト顔を見詰めて思ひ入れ。

しづ 知らぬ事とて

ト 継り寄る。

りく オ、尤もでござんす。

ト 兩人よろしく思ひ入れ。唄になり、五つの鐘、拍子木の音。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う残らず並びし貸し土蔵、天水桶、うしろ黒幕。すべて油堀のあたり。よき時分より初午の鳴り物に變り、道具とまる。

ト 仕出し四人出て來り

仕一 今夜は好い宵宮でござるの。王子はさぞ賑はひませう。

仕二 左様でござらう。わしらは明日は、半田へ参ります。

仕三 それはようござらう。わしは眞崎稻荷様へ願はどきかごひつた。

仕四 御一緒に参りませう。

皆 サア、ござれ。

ト 矢張り鳴り物になり、仕出しは向うへ入る。東の口より文藏、スタくと出て來り、舞臺へ來て

文藏

ア、コレ、どうぞ金兵衛に逢つてと、會所の用もそこくに、あの男が居さうな所を尋ねてあるくも、どうぞ騙して先達で、香爐を請けた二百兩、極印のある持參の金を、取返さねば跡の難儀と、話しておいたお宮の方から、金の都合が出来たかと尋ねの文。先刻に内で親仁様が、矢張りお賤が心の濟むやう、見せるがよいと云はしつたが、極印の金の事、書いてあるこの文

ト出し

この文言からひよつと又、親仁様のお案じと、それゆゑあの場で見せぬのも

ト思ひ入れあり

ア、コレ、どうぞ金の工面が……オ、それく、爰から直ぐに干鯛場の、友達の所へ行つて是非と云つたら、ひよつと工面が……ドレ、相談して来ようか。

ト流行り唄になり、文藏花道へかゝり、向うへ入る。直ぐに聖天になり、下座より三太、延喜の金を持ち、徳松、丁稚にて附いて出て

徳松 コレく、三太どの、延喜の金を何にするのだ。

三太 これか、こりやア爰へ落して置いて、通りの者に拾はせて置いて遊ぶのよ。

徳松 コレ、貴様は若旦那のお迎ひに出たのぢやアないか。

三太 それがどうした。

徳松 それにマア、遊んでゐると、早く行かつしやいよ。

三太行かうが行くまいが、おれが勝手だ。打ッちやつて置きやアがれ。

徳松 なんだ、置きやアがれだ。

ト兩人捨ぜりふにて争ひ、金を捨て、下座へ入る。向うよりおふき、留守居提灯をともし、出て来り

ふき あのマア三太めは、どこへうせた事ぢややら。たうとうわしに箱提灯を持たせて。どこの國にか

姫御前のあられもない、女の提灯持ちとは、エ、自烈たい。

ト本舞臺へ来て、右の金に踏みかけ、灯にて見つけ

こりやコレ慥か百兩包み。

トこの時、ドロ〜と初午の太鼓を打つ。おふき恟りして口をふさぎ、思ひ入れ。釣ろなくの合ひ

方になり

オ、それよ。傳へ聞く盛衰記の梅ヶ枝は

ト思ひ入れ。向うより寅松出て来り

寅松 髪結ひどんは居りませんかえ。

トうか〜舞臺へ来り、おふきに突き當り、兩人顔見合せ

ふき 貴様は寅松どんぢやアないか。

寅松 ハア、おふきどんだの。

ふき エ、この子は恟りしたわな。

寅松 おれも恟りしたワ。さうしてこなたは夜夜中、どこへ行くのだ。

ふき エ、口巧者な。貴様こそ、先刻若旦那のお供を云ひつかつて、どこを遊んでゐるのだ。

寅松 おらア髪結ひどんを探すのだ。

ふき エ、夜夜中ナニ髪結ひどんが歩くものか。そんな事を云はずと、この提灯を持って、早く若旦那

那のお迎ひに行かつしやい。

寅松 そんなら、この提灯を持って迎ひに行くのか。

ト提灯を取らうとして、おふきが持つてゐる金へ思はず手をかけ

オヤ、こりやア金ぢやアないか。

ふき ア、コレ、この金は

寅松 こりやアこなたは、駈落ちをするのだの。



ふきエ、何のこつたな。

ト振り切る。

寅松 そんなら旦那様にこの事を

ト行きにかゝる。

ふきア、コレ。

トとめる。

寅松 エ、放さつしやいな

ふき イヤ、とめたく、とめたわいなア。

ト聖天になり、兩人草摺もやうのおかしみよろしくあつて、ト寅松、金を持つて花道へかゝる。

おふき、これを追ひかけ、花道にて立廻り、右の金を落し、兩人向うへ入る。引違へて向うより九兵衛、羽織股引、町人の形にて、淨瑠璃を語りながら出る。跡よりお鶴、手拭をかむり、誂らへの形、草履下駄にて、ウソく出て来り、よき所にて行きあひ、思ひ入れあつて

つる モシく、あなた様、ちよつと御無心がござりまする。

九兵衛 なんだ、御無心だ。暗闇から女の聲で、恠りさせたが、用は何だえ。

つる ハイ、別の事でもござりませぬが、私は長々煩らひました亭主と……ツイ別れまして、母親一人養育いたし、それも病人。申し兼ねましたが、朝夕にさし詰まりまして、斯様に女子の恥かしい御無心。お人柄を見かけてお願い申します。どうぞ御合力をお願い申します。

九兵衛 ア、そりやア氣の毒な事でもござるの。併し、持ち合せはなし、折角女中の無心に、ア、コレ、どうぞして進ぜたいものだが

トいろくして、紙入れより二朱一ツ出し

まんざらでもない女中の、暗闇での無心は、よくくな事と思ひます。コレ、かみさん、爰に持ち合せの兩一、少ないが小遣ひにでもさつしやるがよい。

ト渡す。お鶴取つて、九兵衛の手をキツと握り

つる これはマア、有り難うござりまする。

ト會釋して手を握る。九兵衛、アルくして

九兵衛 ハテサテ、こなさんは、病人の阿母の看病とは、ア、親孝行な。殊に暗がりなり、この手の尋常さ。顔はしかとは解らぬが、どうやら濱村屋といふ代物。惜しいものぢやが、ア、コレ、此のま

まにして置くは、ハテサテ残念。いつそ上つたわい。

八三九

椿梅座一色

八三九

椿梅座一色

八三九

椿梅座一色

八三九

椿梅座一色

八三九

椿梅座一色

八三九

椿梅座一色

八三九

椿梅座一色

八三九

つる 南鯨なんけい一片ぺん。ア、無ねえにやアましか。  
ト小氣味こきみ悪いわる思おもひ入いれ。残のこり多おほい體ていにて、流は行やり唄うたになり、向むかうへ入はいる。お鶴つる跡あと見み送おくり

ト懷かこより襟えりに掛かけたる財布さいふ入いりの二百兩にひゃうりやうを出だし、中なかへ打うち込こみ  
ア、コレ、どうぞ三百兩さんひゃうりやうの都合ごうごふに拵こしらへたいものだが。おつりきな代物しろものがか、ればいゝが。

ト向むかうの方ほうを見みて思おもひ入いれ。矢張やはり初午はつうまの鳴なり物もの、時ときの鐘かね。向むかうより按摩あんま、黒本細くろほんの頬ほかむり、頭巾づかん、  
羽織はおり、やつし一本差ほんさしにて、杖つゑを突つき、出でて來くる。お鶴つる窺うかがひ見みて、そろくと差さ寄より。

つる モシく、申まし兼かねましたが、  
トしなだれ寄よる。

按摩 按摩あんま鍼はりの療れう治ち。

ト一文笛もんぶえを吹ふき、下座げざへ入はいる。お鶴つる呆あれて

つる エ、氣きが違ちがつたさうな。

ト流行は行やり唄うた、時ときの鐘かねになり、つぶやきながら下座げざへ入はいる。矢張やはりこの唄うたをかり、向むかうより文藏ぶんざう、引返ひきかへして出でて來きり、花道はなみちにて、

文藏 ア、コレ、間まの悪わるい時ときといふものは、どこへ行いつても出でまして留る守す。斯かうなると、友達ともだちでも留る守す

を使つかふものだて。ア、コレ、どうぞ金かねの工面くめんが

ト矢張やはり唄うたにて、舞臺ぶたいへ來きり、落おちてある延喜えんぎの金かねに瓜つまづき、透すかし見みて

何なにだか落おちてあが。

ト蹴けつて見みて、思おもひ入いれあり、ソツと取とり上あげ、思おもひ入いれあつて

エ、いまくしい。金かねの工面くめんの最中さいちゆうに、延喜えんぎの金かねを拾ひろふとは、こりやア何奴なにやつか、おれを焦こらす  
爲ためにしたのだな。根性こんじやうが僻ひがんで居ゐれば、猶なほ々腹はらが立たつて、エ、。

ト捨すてようとして思おもひ入いれあり。

イヤく、延喜えんぎの金かねでも形かたちは小判こはん、暗闇くらやみで拾ひろふとは、これが延喜えんぎか、捨すてるでもねえわえ。

ト左ひだりの袂たもとへ入いれる。この時ときお鶴つる、財布さいふの紐ひもを締しめながら出でて、後うしろに窺うかがふ。

ア、暗くらい晩ばんだ。ドレ、更ふけねえ内うちに佐賀町さがまちまで、もう一軒けん相談さうだんして。

ト下座げざの方かたへ行いかうとする。

つる ハイ、あなた様さま、ちつとお願ねがひがござりますする。

ト左ひだりの袂たもとを捕とらへる。袂たもとの中なかに延喜えんぎの百兩ひゃくりやうあり。お鶴つるこれを探さがつて思おもひ入いれ。文藏ぶんざう透すかし見みて

文藏 女おんなの聲こゑで暗闇くらやみから、願ねがひとは何なんだえ。

つる ハイ、別の儀でもござりませぬが、私は亭主に死なれまして、その上一人の母が大病ゆゑ、詮方なさに御覽の通り、夜に入つてから往來のお方様へ、お袖に縫つて御無心申します。どうぞ御合力をお願い申します。

文藏 ア、なにか、親の爲の袖乞ひか。して、御亭主も、死なれたと云はつしやるの。

つる 左様でござりまする。世に頼みない、女やもめでござります。

文藏 ハテ、そりやア氣の毒な。して、どこのお人だ。

つる ハイ、この近所の者でござりまする。

文藏 近所はどこだえ。

つる アイ、平野町と申す所の者でござりまする。

文藏 エ、アノ平野町の

トいろく透し見て

ハテ、そりやア氣の毒な。今日の生活に盡きて、若い身空で袖乞ひの、殊にどうやらまんざらな生れつきでもない女中。ハテ、よくくくな。

つる アイ、御推量なされて下さりませ。

ト文藏が袂に縫り、しなだれるうち、延喜の金の目方を引いて見る思ひ入れ。

文藏 此方もちつと入用な、先立つ物は金の事と、身につまされてお互ひに、ア、氣の毒に思ふばかり。お恥かしいが折悪く、

つる イエモウ、その御深切は、受けましたも同然。折ございませうなら、また重ねてなりとも。

文藏 アイヤ、進ぜる程はござらぬが、二朱や三朱の事なれば。

つる 少々なりとも、なんの否とも申しませう。

文藏 待ちなさい。

ト紙入れを探し、一分を一つ出し

お恥かしいが心ばかり、取つて置かつしやりませ。

ト差出す。お鶴その手を取つて

つる 僅かなお錢を貰ひたく、この暗がりでの袖乞ひに、こりやコレお金を。エ、有り難うござりまする。

ト手をしつかと握り、思ひ入れ。この時お鶴、帯に狭みし二百兩の財布アラリと下がる、文藏フツと手をかけ、貫目を見て

文藏 一錢二錢の合力受けて、身すぎする袖乞ひ女、思ひがけない財布の金。慥かに量も  
つるエ。

八四四

ト懐へ入れる拍子に、握りし手を放す。文藏、ザロく見て

文藏 まだ宵闇の星あかり、その面ざしも物ごしも、袖乞ひしさうな風でもなし、どこか如才の無ささ

うな、道樂者の女房と、見えるお前のその風體。して、平野町は、ぬしの内かえ。

つるアイ、木屋と申しまする地主の借家。夜の出入りは新道から、この間移りましたわいな。

文藏 エ、この間越したのか。そんなら木屋の、アノ借家に。

つるアイ。御存じかえ。

文藏 アイヤ、知つたでもなし、知らぬでもなし。かみさん、ほんにこなさん、獨り身か。

つるアイ、疾からやもめの獨り棲み、

文藏 誘ふ水ありや誘はれる、仇な身持ちに爰へ出て

つるしみたれ女房の袖乞ひを、なんの、どなたが

文藏 相談するのにか。

つるエ。

文藏 當時女に凹まされ、御縁の採める出合ひ頭。女の世話がして見たいの。

つる そりや嬉しいが、お前、わつちを……イ、エ、わたしをお騷りかえ。

文藏 イ、ヤ眞賞。騷らぬ證據は、コレ。

ト後より抱きつくとして、懐の二百兩を探る。お鶴も文藏の袂の百兩が手に觸るゆゑ、兩人一度に思ひ  
入れあり。

つる わつちが内へ、

文藏 ヤ。

つる アイヤ、わたしが内へ。

文藏 行つてもよしか。

つる 誰れに遠慮が

文藏 亭主に遠慮サ。

つる エ、憎いなう。

ト寄添ふ。

文藏 闇で仕合せ。

つる眞の事だよ。

ト抱く。時の鐘にて、この道具ふん廻す。

本舞臺、三間の間、向う鼠壁、下の方に竈、荒神棚に札守、臺所道具をかけ、縁無しへりなしの畳を敷き、木綿蒲團を掛けたる置き炬燵。破れ行燈を灯し、門口に錠をおろし、路地の出入り。この見得にて道具とまる。

ト内に遠州の九助、古き女物の布子を着て、置き炬燵にあたり、茶碗酒を飲み、蛸の足を嚙つてゐるお鶴、文藏、花道の附際へ来り

つるモシ、爰でござんすわいな。

文藏ア、爰がお前の内か。

つるアイ、お恥かしい、裏家も同然。

文藏入つて話さうわな。

つるちつと待ちなさんせ。

トお鶴、舞臺へ来り、門口の戸を半分ほど明け

モシ、母さん、いま戻りましたぞえ。

九助オ、姐御、戻らしたかえ。

ト云ふをお鶴、「コレ」と思ひ入れあり、ちよつと囁く。九助うろたへ、腰の手拭を取つて頭へ巻き、二枚屏風を立て、急に婆アの病人の眞似をして、俄に唸りゐる。お鶴、捨ぜりふにて、そこらを片附ける。此うち文藏、門口へ来り、内を覗く。この時兩人顔見合せ、思ひ入れあり。

つるサア、此方へお入りなさんせいな。

文藏アイ〜。

ト内へ入り

ア、行燈が灯つてゐるの、阿母は寐てかえ。

つるアイ、さうでござんせう。モシ、母さん、いま戻りましたぞえ。

ト九助思ひ入れあつて

九助ア、娘、いま戻つてたもつたか。わが身の留守の間、糠がさしこんで、ア、胸先がト二枚屏風の蔭にて、見えぬやうに蛸の足を嚙り、茶碗酒を飲んで、唸る思ひ入れ。

つるそりや折悪うわたしが居らいで、さぞ難儀なされませう。

九助 イヤモウ、大きに難儀しましたわいの。

ト此うち文藏、ザロ〜見廻し

文藏 ア、病人の阿母一人、内へ置いて、さぞ母さんは心細からうに。

ト九助へ目をつける。お鶴、九助の側へ来て

つる 今日(けふ)は餘程(よほど)心よいやうに存じまして、それゆゑお一人置き申しまして、眞崎稻荷様へお詣り申した道で、あなたにフツと行きあうて、お連れになつて来る道々、難儀な事をお話し申したりや、御合力を下さりました。お前、お禮を云ひなさんせ。

ト金を出して見せる。九助見て

九助 そいつはよかつた、それぢやア、マア酒が飲める。

ト云はきとして

ア、さても〜御深切な。ようマア御合力下されました。旅は道連れ、世は情。ア、南無阿彌陀佛々々々々々々。

文藏 ハイ〜。モシ、母さん、ア、お前孝行な娘御を持ちなされた。来る道々も、難儀な話を聞きやしたが、コレ女中、お前また、人並過ぎた器量で居ながら、なぜ又人の世話にでも

つる それも如才はござんせぬが、何でマア此やうに、しみたれてゐる者を、どなたがお世話に

文藏 わしならするの。こなさんも暗がりで……コレ、錢貰ひをするよりは、小やすくも圍ひ者か、マ

ア、向うに當を拵らへるがよい。

つる 拵へたうても、この暮しでは。

文藏 イ、ヤ、案じねえがい。わしが世話をしませう。

つる エ。アノ、お前さんが

文藏 世話して進ぜう。斯う男が云ひ出しては、おれが女房にしたも同然。これから互ひに奥底なく。

つる 姉のやうなわたしでも、女房同然に思つて下さんすなら

文藏 そりやア此方も踏んこんで、内證向きの何やかや

つる 面倒さへ見て下さんすりや、わたしも女の精一ぱい。

文藏 あの阿母に孝行盡して

九助 オ、嬉しい〜。

つる 奥底無しに打割つて

文藏 女房の物は亭主の都合。

つる 亭主の都合は女房の物。

九助 それく、親の物は子の物、人の物は我が物。構ふ事はねえ。なう、姐御。

ト我れを忘れて云ふ。文藏 惻りして

文藏 ヤア、阿母だといふは。

九助 エ、。

ト思ひ入れ。この時お鶴、延喜の金を見て

つる ヤア、こりやア小判と思ひの外、土でこせえた延喜の金。

文藏 こりやア婆アといつたのは、亭主だな。

九助 イ、ヤ、おらア居候ふ。

文藏 ヤ。

九助 仕事にかけて引込んだ、此方を其方で仕事にかけるか。

文藏 イヤ、仕事とやらは知らないが、野郎が婆アに化けるやら、油断のならぬ袖乞ひの、甘い詞に附

け込んだも、こなたの持った財布入り、小二百兩のその金を

つる エ。

文藏 借りたうござる。貸して下さい。

九助 イヤ、今時の素人には、油断も透もなるこつちやアないわい。

つる ウム、そんなら此方のこの金を、取らうばかり暗がりの

九助 よみやはしたる初午の、真赤なお強飯にかけるのか。姐御、こりやモウ地金を

文藏 イヤサ、これにやア段々譯の、

つる 長い話しを聞くものかな……エ、寒くなつた。炬燵を貸してくんねえ。

ト文藏をかきのけ、上の方へ行き炬燵へあたる。この時下の路地より徳兵衛、草履下駄を穿き、丁稚の徳松が肩へか、り出て来て、徳兵衛ちやつと唾く。徳松のみこみ、元の所へ入る。徳兵衛、門口に窺ひゐる。お鶴思ひ入れあつて

コレ、この頃ちつとしみたれて、或ひは稽古所茶屋小屋を、無心に盡き果て往來の、人に當つて錢貰ひ、騙して見たり高飛車に、又は體をぶツつけて、身を切り見世は稼がぬが、月圍ひから寺大黒、とゞが宿場へ納まつて、生れも附かぬ刺青は、悪婆の見習ひ生ぬるな、女湯ならば板の間を、稼ぎも世渡り世間ぢやア、うるさがられる半ぎらお鶴、首の細つた年増だよ。それをこなさん、足を附けて、物した物の上前取り、てもおツかねえ二才だの。

文藏 イヤ、見かぢつたのが因果の始まり。是非とも借りてゆかにやアならねえ。

つる イケあつかましい無宿やら、素性の知れぬ小二歳に、達引がいるものか。出来ねえ話した。よし  
てもくんな。

ト財布を引ツたくる。徳兵衛聞き耳立てる。

九助 おいらが金を借りやうとは、上前取りのよい首代、わしが路銀に貯への、小判の數も百兩あまり。

ト木綿財布の金を見せる。

つる 亭主の命の綱にもと、貯めた金の二百兩、無駄にはなつたが、外に義理あるその人へ。

文藏 身貧な借家に三百兩、怪しけれどもその金を

つる こなたに預ける。

九助 呑みこんだ。

文藏 道ならねども、その三包み。

トかゝるを九助、文藏を突きつけ

九助 エ、あつかましい。邪魔ひろいだら。

ト勝手の出刃を取つて打つてかゝる。文藏引ツたくつて九助の眉間を割る。九助「ワツ」と云うて

うぬ、疵を附けたな。

トこの手を押へ、出刃を引合ふはすみに、誤まつてお鶴の脇腹へ突き立てる。この物音を聞き、門口  
にて徳兵衛、いろくんに思ひ入れ。

ヤア、姐御も出刃で

トよろぼひ寄るを、文藏當てる。九助「ウン」と倒れる。この時文藏の懐より文落ちる。お鶴よろぼ  
ひ、文を取つて、上書を見て

つる 「文藏さまへ、宮より。」

文藏 ヤ、その文は、

ト取らうとする。

徳兵 すりや、お鶴が内に文藏は

文藏 親仁様か。

徳兵 文藏、譯は

ト内へツカくと入る。

文藏 ア、コレ、危なうござるぞ。



つる、木屋の旦那の一言に、文藏譯はと仰しやる上、爰へ落ちたる文の宛名も文藏さま、そんならあなたが

文藏 十右衛門が弟の文藏なれど、金に詰まつて

つる モシ、これ御覽じて下さりませ。

ト襟に掛けたる守り袋の中より書き物を出す。文藏取つて開き

文藏 ヤ、「御代官所へ差上げ申す一札の事。」

徳兵 ヤア、。

つる ウム。

ト苦しむ。

文藏 モシ、その女は、手を負つて居りますぞえ。

ト徳兵衛探り寄り

徳兵 コレ、氣をしつかりと……して、書置の文言は。

ト時の鐘、誂らへの合ひ方。文藏、行燈を引寄せ

文藏 「書き残しり、私し夫、これまで盗み取り候ふ金子、残らず調達仕り候は、萬一命も助か

り候はんと、女の淺き心より、さまざまと金拵へ候ふところ、天罰にや病死いたし、死首ながら  
梟木に晒され候ふとの事。その上、四つ石の極印御座候ふ三百兩、葛飾さま方へ仕入れの金と偽  
はり、預け置き候ふ由、十右衛門さま御事、夫の素性を決して御存じなく、預かり置き候へば、  
何卒右の三百兩差上げ候ふ上は、露ほども十右衛門さま、弟御文藏さまにも、御存じなき御事に  
候へば、御疑ひ御晴らし下さるべく候ふ」——ヤ、、、、、、そんならお鶴は

徳兵 アノ盗人の

つる モシ、これといふのも女の身で、恐ろしい巧み事、この身に報ふ天罰の、遁れぬ譯も皆金ゆゑ。

これで揃うた三百兩、極印打ちし金の代りに。

ト九助が金を一つにして文藏へ差出す。

文藏 流石はお鶴。

徳兵 悪い男に添うたが因果。

九助 上前取りのその上に、よく此やうに

ト文藏へかゝる。見事に引敷く。お鶴、落ちたる出刃にて、九助の胸許を突く。九助「ア、」と苦しむ。文藏、これを見て

文藏 ヤア、。

ト思ひ入れ。

つるサア、跡の難儀を引受けて、相手になつたわたしが自害。

徳兵 すりや、早まつて

文藏 ア、女に稀れな。

徳兵 コレ……門を締めやれ。

文藏 ハイ。

ト門口を締め、兩人思ひ入れあつて手を合せる。木の頭。お鶴、バツタリ落る。

ひやうし

幕

### 大切

### 葛飾十右衛門内の場

役名——十右衛門女房、おりく。徳兵衛妹、お賤。同下女、お米。菜賣り、曲り金の仁太。葛飾十右衛門。木屋文藏。油の九平次。犬上團右衛門。長谷部運太夫。手代、金兵衛、船頭、十太。

遠山甚三郎。

本舞臺、世話場の屋體、上方唐紙の押入れ、のれん口、下の方床の間、真中に籠花活けに梅の花を挿し、下手の口二階、階子たて、下は杉戸、階子をかけ、門口、この外に木戸を取付け、誂らへの通り、爰に十六、又内、茶屋場の形にて、棕櫚箒を槍にして、上草履を持ち、供先の稽古してゐる。上に九平次、咬へ煙管にて寝ころび、指圖してゐる。門の外に糞屋、繩釣瓶をかけてゐる。通り神樂、てんつゝにて幕明く。

ト十六、又内、いろくあつて、槍も草履も投げ損なふ。

九平 ア、コレく、又も十も、それでゆくものではない。槍も門の出入りに、ぐるくと廻すばかりぢやアない。ありやア一體、九字を切る心だ。

十六 九字を切るとは、そりやア大阪無盡か。

九平 べら坊め。コレ、草履を投げるにもナ、大分秘密のある事だ。投げるのは、丁度子供が

又内 西は何方といふやうか。

九平 おきやアがれ。なんほ屋敷日雇だといつて、心の持ちやうで出世も出来らア。親分のアノ葛飾十

右衛門どのを見やれ。

又内 それよ。元は千葉のお屋敷に勤めてゐたさうだが、今は神田で何の某。

十六 女房といやア、あの美しいおりくさん。

九平 イヤ、美しいばかりで、とんだ情知らずよ。

又内 ヤ、情知らずとは、九平次。

十六 さては當りかけたかな。

九平 エ、べら坊め、そんなさしを云はずと、供先に白く見られぬやう。

兩人 もう一遍やるべいか。

トまた稽古する。通り神樂にて、向うより十太、前の船頭形にて、漁替へ柄杓を擔ぎ、出て來り

十太 オ、いつもの籬屋どん、爰に居たか。方々尋ねるやつサ。

箱屋 なんぞ急な御用かえ。

十太 サア、商賣物の漁替へが洩るから、かけてもらはうと思つて。

箱屋 もうこの釣瓶が終ひだから、今に行きやす。

十太 イヤサ、網に沖へ行かにやアならないが、あの替へが悪くつちやア、早手にあつた時に大事だ。

トこの聲に九平次、門口へ來り

九平 オ、こりやア十太、今日も沖へ行くか。

十太 一日でも行かにやア、願が干上がりやすワ……干上がるといへば、お前に見てもらはうと思つて

ゐるが、一昨日干潟へ見突に行つた歸り、喰ひ酔つて桐ヶ谷の藪際に寐てるたら、何奴か、とん

だ物をぶつつけて行つたがよ。

九平 それはとんだものだ。

十太 何だかカウ、茶碗のやうな。

九平 そりやア見たいものだな。

十太 アイ、新道から行つて取つて來やせう。

箱屋 アイ、モシ、釣瓶が出來やした。

九平 オイ、錢は一緒にやらう。

箱屋 アイ、そんなら十太さん。

十太 ドレ、行つて取つて來べい。

ト箱屋は荷を擔ぎ、十太附いて木戸の内へ入る。通り神樂。九平次、釣瓶を二重へ上げながら

九平 オ、釣瓶で思ひ出したが、かみさんが、奥の庭を掃除して置けと云つたが。

十六 ほんに、それく、云はれないうち

又内 ドレ、掃除をして置くべいか。

ト矢張通り神樂にて、兩人奥へ入る。

九平 今あの十太めが、寐てるる所へぶち込んだとは、何だか知らん。そりやアさうと、豫ねてあの團右衛門さまから、預かつてるる千葉家のこの書き物。今日らは取りに来さうなものと、懐へ入れてるるが、ア、コレ、心遣ひ。ちやつとどこぞへ。

トあたり見廻すうち、通り神樂にて、向うより金兵衛、破魔弓を手拭に括りつけ、擔ぎ出て來り、門口にワロくしてゐるうち、九平次はこれを知らずに、右の書き物を床の間の花活けへ隠す。金兵衛合點のゆかね思ひ入れにて

金兵 モシ、九平次さん。

九平 エ。

ト惻りしながら花活けをかけ

金兵衛どん、何ぞ用があつて來たか。

金兵 イヤサ、わしは十右衛門さんに話があるが、内にかえ。

九平 イヤ、頭はどこへ行つて留守だ。

金兵 ハテ、そりやア

ト云ふうち木戸より十太出て來り

十太 モシく、九平次さん、その見せようといふ物は

九平 ア、これサ。

ト花道へ連れて出て

マア、どんな物だ。

十太 サア、茶碗にしては足があつて、何だか不細工な。

ト前幕の香爐を出して見せる。

九平 ヤ、こりやコレ四方出の

十太 エ。

九平 イヤサ、鹽壺か、嘗め物入れにしなければならないこの瀬戸物。併しマア、頭が歸つたら見てもらふ程に、置いて行かつし。

十太 そんなら預けて行きやすが……ア、二百にもなればよいが。

ト通り神樂にて十太向うへ入る。

九平 思ひがけない四方出の香爐、こいつは好い正月が出来るわえ。

ト舞臺へ来るうち、金兵衛、今見かちつた花活け、合點のゆかね思ひ入れにて、中の袋入りの書き物を見付け、なんでも好い物だらうと取出し、花活けは掛け、ウロ／＼する内、九平次来るゆゑ、持つて来た破魔弓の筒の中へ隠すうち、九平次門口を入る。金兵衛キヨロ／＼する。

金兵衛どん、をかした、何をキヨロ／＼するのだ。

金兵衛 イエサ、内の子の持遊びに、この破魔弓を餘所から貰つて

九平 邪魔なら打ツちやつてしまふがよい。

ト取るを

金兵衛 ア、これサ。そしてマア、十右衛門さんの歸るまで、ちやつと見附前まで行つて来たいが。

九平 そんなら、この破魔弓を、爰へでも掛けて置くがよい。

ト下の柱へ掛ける。

金兵衛 でも、それぢやア

九平 ハテ、邪魔な物を持って歩かずと、どうで行つて来るぢやアないか。

金兵衛 それもさうか……ドレ、行つて来ようか。

ト通り神樂にて、金兵衛下の木戸へ入る。九平次、香爐を捻くり廻して見てゐる。此うち流行り唄になり、向うよりお米、前幕の形にて、ツカ／＼と出て来り、門口より

よね モシ／＼、葛飾十右衛門さまのお宅は、これでござりましたな。

トこれにて九平次あわて、最前の釣瓶置きある中へ香爐を隠し、ドキマギしながら

九平 成る程、此方でこんすが、どこからござりました。

よね ハイ／＼、私は深川から参りましたが、どうぞ内方のおかみ様に、お目にかゝりたうござります。

九平 アイ／＼、用なら呼んで進ぜう……モシ／＼、おりくさん

ト合ひ方になり、奥よりおりく、箕盆を提げて出て来り

りく 九平次どん、何ぢやぞいの。

九平 深川から来たと、アレあの女中が待つて居ります。

トおりく、お米を見て

りくオ、こりや平野町のお米どの、こなさんごさんすからは、わしが云うた通り  
よねサア、お賤さんをお連れ申して

ト云はうとするな

りくア、コレ

ト目まぜして、門口へ連れて出て囁く。

よね ハイ、く、畏りました。

ト通り神樂にてお米向うへ入る。おりく、内へ入る。

九平 おりく様、今の女は、ありやアどこから来ました。

りく ありや深川の木屋から、使ひに来たのぢやわいの。

九平 わしやア又深川といふから、親分が馴染みの女郎屋から来たと思つた。

りく なにを。今こちの人が、そんな浮氣な事をなさらうぞいの。

九平 この間も下谷の巖隨寺で、日が暮れてしかとは知れぬが、慥か娘らしい者と二人

りく エ。

九平 サ、浮氣な亭主を、後生大事に守つてゐると、日頃から心を盡すこの九平次、もう大概に得心し

りく 又かいなア。アタ嫌らしい。

九平 お前ばかり真面目でも、親分は外へ出ると

りく 何を、人をしやくりちらかして

九平 イヤサ、しやくるのぢやアないが、女郎ござれ、圍ひ者、若後家、お乳母、マアおれが云ふ事を  
聞きなさい。

ト捨ぜりふ。此うち通り神樂にて、向うより十右衛門、羽織一本差しにて、ツカくと出て来り、内  
の様子を聞いてある。九平次これを知らず

子守り飯焚き婆アでも、女さへ見りやア、嫌らしく抱きついて  
ト抱きつくを

りく エ、何をするのぢやぞいなう。

九平 イヤサ、こりやア親分が助兵衛の講釋。十右衛門改名いたし、助兵衛だく。

ト又しなだれる。十右衛門ズツと入り、九平次を突きのける。  
ヤア、親分か。

ト恟り。

十右 イヤ、助兵衛た。

九平 エ。

ト術なき思ひ入れ。

十右 九平次、助兵衛の講釋を、もう一遍聞かうか。

九平 イヤサあれは

十右 無駄ばかり吐かさず、奥へ行つて、似合つたやうに、釜の下でも焚きやアがれ。

九平 ムウ。安い奴サ。

ト合ひ方になり、釣瓶へ思ひ入れするを、十右衛門睨めるゆゑ、是非なくツイと奥へ入る。

りく こちの人、間がな透がな彼奴が

十右 エ、打ツちやつて置け……時に、云ひ附けて置いた二階の事は、何もかも好いか。

りく そりや好うござんすが、内に用もたんとあるに、お前はマアどこへ行かしたぞいなア。

十右 殿甚三郎さまのお行くへが知れぬと、あへ返すところへ、かて、加へて馴染みのお初どのが、**駈**

出してならぬと云ふゆゑ、よく意見云つて、深川の親方へ預けて來た。

りく 意見といへば、こちらの人、お前にちと頼みがござんす。  
十右 頼みとは。

りく サア、昨日平野町へ、ちよつと行つたところが、お前の弟文藏さんに娶合すといふ娘御に、初  
めて逢うたところが

十右 ムウ、その娘は、まだおれは間違つて逢はぬが、どうぞしたのか。

りく サア、文藏さんを嫌うて氣隨氣儘、兄御の徳兵衛さんと兄弟いさかひ、氣の毒さに連れて戻つて  
意見云はうと話し合つたところが

十右 話したところが

りく 思ひがけない、わたしが妹でござんしたわいなア。

十右 エ。

りく サア、お前にも豫ねて話して置いた、小さい時に別れた

十右 ハテ、そりやアとんだ事だの。

りく サア、わたしが妹といふ事が知るれば、猶更捨てゝも置かれぬゆる、今日連れて来る筈に、約  
束して来やんしたが、お前の氣を兼ねて、向うの角に待たせて置いたわいの。



十右エ、夫婦の仲に何の遠慮。早く内へ呼ばばよいに。  
りく そんなら爰へ呼びますぞえ。

ト門口へ出て手を叩き、向うを招くと、出の唄になり、花道よりお賤先に、お米付き、出てくる。

サア、妹、こちらの人の機嫌もよい程に、遠慮せずと早くおぢや。

しづ 姉さん、初めてお目にかゝる兄様が、氣随な奴ぢやと、定めて

りく なんの、吐るやうな野暮ぢやない。わが身も逢うたら、姉の連合ひ、遠慮に及ばぬ。わしに隠す  
事はない。打明けて

しづ 頼んでもようござんすかえ。

りく ほんに、自慢ぢやないが、わが身にもあのやうな男を持たせたいと……ホ、ホ、ホ、ホ、こりやお

米どの、大儀でござんした。内へ行んだら徳兵衛さまに、お賤は今宵泊めます、しつかり預かり

ましたと、よう云うて下さんせ。

よね ハイ、左様なら又、お迎ひに参じませう。

ト通り神樂にて、お米向うへ入る。

りく なんに、あのお米は、よい使ひ頃。今年も重年であらう。

ト捨てりふ云ひながら、お賤恥かしさうに門口を入つて、そこへ出る。

十右 こりや初めて

ト互ひに顔見せ

しづ ヤア、お前は。

十右 其方は。

ト惻り。

りく お前方は近附きかえ。

十右 ア、イヤ、初めて逢つたわが身の妹、なんの知らう筈はなけれども

しづ あんまり初々しさにツイ

ト思ひ入れ。

りく なんの、初々しいと云つて、これがほんの親は泣寄り……したが、こちの人、早速マアお前の弟御、養子に行つた文藏さんを嫌やるは、内證にどういふ事があるか知らねど、不所存な事ぢやないかいなう。

十右 サア、それも何ぞ、餘儀ない事であらうわサ。

りく サア、その餘儀ない事も、お前に意見云うてもらうて、あれが得心すれば、親類内も丸う納まる  
どうぞマアとつくりと。

十右 サア、そりや好いやうに、おれが云はうよ。

りく お前の意見で、きかぬと云うたところが、わたしもたつた一人の妹

しづ 姉さん、わたし不便と思つてなら、矢ッ張り尼にして下さんせいなア。

ト思ひ入れ。

りく エ……これいなう、この間まで、そんなに氣随もあつたなれど、ふツつりやんで、髪も形も派手  
やかになつたは、尼になる心もないと、内外の噂。それに又そんな事云やるも、矢ッ張り内證に

ト思ひ入れ。

こちの人、お前も肝癪起さすと、あれが心の濟むやうに。

十右 そりやマア、胸を聞いた上。

りく 文藏さんとの縁も、術よく切つて、あれが思ふ男に、どうぞ添はせて下さんせ。こちの人。

十右 ヤ。

りく お前の意見が獨參湯、見立て違ひのないやうに、よう云ひ聞かせて下さんせえ。

ト唄になり、おりく思ひ入れあつて奥へ入る。お賤は始終恥かしく、俯向いてゐる。十右衛門思ひ入  
れあつて

十右 思ひがけない、女房が妹だと連れて來たは、この間巖隨寺で

トちよつと顔見合せ

殊更弟の文藏に娶合すとあれば、これ重縁、それをマア、知らぬ事とて

ト思ひ入れあつて、側ににじり寄り

コレ、お賤、其方はアノ芝居でする、お半長右衛門の狂言、何と思つて見やるぞ。

しづ 何と見ませう。お半は尤もな事ぢやと

十右 それく、それが悪い。たとへ身持ちにならうとも、おろす流すといふ事もあれば、どのやうに  
もして嫁入りすればよい事を、その身の片意地から、末の末まで憂恥をさらす。今時あんな事が  
あつたとて、マアおいらなら知らぬ顔で祝言し、浪風ないのがこれ當世。この間の事は、ありや  
おかしい夢を見たと思ひ切つて、文藏と祝言してくれ。こんな事とは露知らず、今も女房が其方  
の事、よう意見云うてくれ、もしきかぬとて兄弟の事、術よく文藏とも縁切つて、あれが望む男  
を尋ね、添はしてくれいと頼まれる程、眞綿で首、其方が爰を聞分けぬと、ツイ暗闇の恥を明る

みへ持出しても、おれだけに桂川とはゆかない、神田川で外聞をかゝにやアならない。

しづ サア、お前が其やうに云はしやんすけれど、あのお半は石部の宿から……わたしやそんな事ぢやござんせぬぞえ。

十右 そんな事でないとは。

しづ これ見て下さんせ。

ト 懐の守より小さな折本を出す。十右衛門取つて

十右 こりやコレ花暦……しかもおれが手だが。

しづ 覚えがござんすかえ。

ト 十右衛門思ひ入れ。お賤恥かしき思ひ入れ。合ひ方になる。

七年以前、お下屋敷の花盛り。わたしやお姫様のお付き、お前は殿様のお供とて、御庭前の櫻狩。十右 ほんに、その時分は、おれも千葉さまの草履揃み。はるか下部もお身近う召使はれ、女中交りの御酒宴のお相手。その砌りは、まだちよつほりの切り禿。

しづ 花が欲しうてあれこれと、折つてもらうてその時に、一重と八重の名が知れず

十右 幸ひおれが小癩から、書いて置いた花暦、雛次に花は付き物ゆゑ

しづ 覺える爲と下さんした、その折これは成人して、おれが女房の結納ぢやと

十右 ツイ戯言に云つたのを、すりや、長の年月忘れもせず

しづ 一生連れ添ふ男ぢやと、心で心に誓ひを立つてましたわいなア。

十右 ムウ。ハテ、思ひがけない。

しづ サア、どうぞと思ふ其うちに、お前は下がつて行くへ知れず、この身は一生御奉公と、思ふに任せぬお暇願ひ。わしにも知らせず兄さんが、あの文藏さんを聳養子。飽かれないばかりに、氣随氣儘のそぎ尼にと、この程お寺の井の許で、逢ふ嬉しさに又その上、思ひがけない二世の固め。どうマア思ひ切られませうぞいなア。

十右 諦らめてくれ。

しづ エ。

十右 サ、おれが悪い。なんの殺生な事をせにやア、おぬしに思ひもさせない、と云つて妹の女房なり、おれが弟の嫁といひ、どう思ひ直して見ても……サ、所詮末の納まらぬ事。とつくり思案しかへて見や。

ト 此うち暖簾口よりおりく出かゝり、これを聞いて入る。お賤しめ泣き。十右衛門持ちあつかひし思

ひ入れ。此うち通り神樂になり、向うより仁太、菜賣りにて、籠を擔ぎ、呼びく出て来て、直ぐに舞臺へ来て

仁太 小松菜やく。

ト門口を少し明ける。

十右 誰れだ。

仁太 モシ、好い菜があるが、買はつしやらねえか。

十右 なんだ、菜賣りか。今日はまだ要らない。

仁太 モシ、さう云はずと、本小松菜だ。廉くして置いて行くべい。

十右 イヤサ、要らないといふに。

仁太 要らない筈。おかみさんと二人、うまい

十右 ヤ。

仁太 サア、こりやア旨い菜だ。ほんに、おかみさんと云へば、爰はこの間菜を賣つた内だ。その時

おかみさんが、又よい菜があるなら、持つて来いと云はつた。どうぞ買つてくれさつしやい。

十右 ハテ、ひつつこい。いま女房は奥に用をしてゐる。なんなら行き廻つてくるがよい。

仁太 成る程、さう云はつしやりやア、その女中さんは、この間のおかみさんぢやアないが、なんでも

好い娘と、うまい所へわしか来たので

十右 エ。

仁太 こまつたやく。小松菜やく。

ト矢張り通り神樂にて、仁太呼びながら下の木戸へ入る。十右衛門、門口を締めようとする内、向う

より團右衛門、家來を連れ、早足に出て来り、直ぐに舞臺へ来て

團右 十右衛門、在宿か。

十右 これはく、何ぞ御用筋でも

團右 其方にとくと談じて……コリヤく、家來、其方は屋敷へ歸り、十右衛門宅に居ると、同役ども

へ届けて置きやれ。

家來 畏りました。

ト向うへ引返して入る。十右衛門はお賤に、爰に居ては悪いといふ仕方。合ひ方になり、お賤思ひ入

れあつて奥へ入る。

十右 サ、マ、お通り下されませう。

團右 許しやれ。

ト上へ通る。

十右 早速ながら、御用の趣きは。

團右 サア、一昨日同役どもより、申し達したとある大事。其方も

十右 成る程、御遊所先より、お行くへ知れざるとある殿様の儀。

團右 サア、表立つて詮議はならず、内々手分けして家中の騒動。其方が方にも、未だ御在所の手が、  
りは知れぬか。

十右 サア、運太夫さまより、御内意あると其まゝ、心きゝたる者を所々へ出し、私しとても駈け廻り  
油断なく穿鑿いたせど、未だそれぞと

團右 御小身の御大名、出奔神隠しなぞあらう筈もなし

十右 お出入りなれば私しも、心痛いたし居ります。

ト通り神樂、バタ／＼にて、向うより運太夫、走り出て来り、門口より急きこみ  
運太 十右衛門、内に居るか。運太夫、急用で罷り越した。

ト草履を穿いたまゝ、内へ通る。

十右 ヤ、これは運太夫さま、いかうお急ぎなされた様子。  
團右 團右衛門もこれに居る。ソレ、疊の上へ草履で。マ、氣を鎮めさつしやれ。  
運太 エ、鈍くさい。

ト草履を取つて抛り出し

コレ、十右々々、大事でおじやる。大事でござる。

トこの時十右衛門、暖簾口より湯を汲み来り

十右 モシ／＼、マアさうお急ぎなされては、仰しやる事が解りませぬ。マ、これをあがつて

ト運太夫湯を取つてグツと飲み、むせる。十右衛門、脊中を叩き、介抱するうち、木戸より仁太、ま  
た呼びながら出て来り

仁太 モシ、先刻約束の菜を持って来ました。買つて下さりませ。

十右 エ、そこ所ぢやアない。取込んでゐる。マア／＼、今度々々。

仁太 そんなら、もう要らないのかえ……エ、今日のやうに悩む事もないものだ。延喜直しに一服吸  
つて行くべい。

ト天秤棒へ腰をかけ、摺火打ちにて煙草のみある。此うち運太夫、また湯をグツと飲む。

十右 運太夫さま、御大事とは如何の仔細。

運太 サア、聞いておくりやれ。一昨日御遊興にいらせられ、その場よりお行くへ知れぬ殿甚三郎さま然るところ明日未明に、鎌倉御所へ出仕いたすべき旨、秩父どのより御書到来。サア、急に出仕と仰せ出されたは、お身持放埒のお糺しか。何に致せ、お行くへ知れざれば、評議も工風も力及ばぬ。サ、お身の頼みは、事に馴れたる其方、なんと急々、お行くへを尋ね求めてはくれまいか。

十右 イヤモ、舊來人足請負ひのお出入りといひ、殊に以前はお草履も摺んだ拙者なりや、御家來も同然なれば、モウ私しが力一ぱい……と申した所が雲を闇。

運太 折悪い急ぎのお召し、家中は猶更、身共が心配、明日までにお行くへ知れねば、御病氣と云ひ立て、急に御養子願ふより、外に思案はおらない……まづ御養子の心當りは

團右 イヤ、運太夫どの、外より御養子には及ばぬ。屈竟な者がござる。

運太 屈竟な者とは。

團右 外でもない、この團右衛門サ。

運太 エ。

團右 今でこそ家來分、身が曾祖父は千葉の連枝、すりや、きつとした血筋でないか。

運太 ハ、先祖は御連枝にもせよ、今は用人、家老よりはるか末座。家中の歸服が

團右 イヤサ、なんほ他家から養子をして、肝腎の一萬丁の、御朱印があるまいが。

運太 ムウ、その朱印は、この運太夫が預かり。紛失せしも殿様と、身共より外知らぬ大事を、どうし

て貴殿は

團右 サ、それは。

運太 なんと。

十右 アモシ、お跡目の穿鑿より、取急いでは殿様のお行くへ。

運太 知れざる様子バツとして

團右 世間へ知れ、ば、千葉家の大事。

運太 兎角内々穩便に

十右 穿鑿いたすでござりませう。

ト此うち仁太、内の者に見えぬやうに、門口にて聞いてゐて

仁太 アイ、モシ、ちつと御免なさいやし。

トすつと内へ入る。皆々恟り。

十右 ヤ、其方は先刻の榮賣り、まだそこに居たか。

仁太 アイ、一服のんでるうち、お前の話し、かいつまんで聞いて、氣の毒だから爰へ出やしたが、その千葉の殿様なら、桐ヶ谷から山續き、金澤の方へ行つたに違ひござりやしない。

運太 ムウ。すりや其方、そのあたりで、殿を見掛けたといふやうな事か。

仁太 見かけたどころぢやアない。しかもその殿様は、なんだか病氣か知らないが、藪際に苦しんでござつたから、わしが介抱して、ちつとよくなつたから聞いたら、なんだか詰まらぬ事があるから、駈落ちするといふからは、出奔に違ひないのサ。

皆々 エ、。

ト恟り。

仁太 サア、わしも骨を折つて介抱して、駈落ちまでさしたからは、お屋敷が知れたら、骨折り賃を貰ひに行かうと思つてゐたところが、丁度幸ひ。お侍ひさん方、褒美に酒手をくれさつしやい。

運太 ムウ。すりや其方、いよく殿様を  
十右 御介抱申したと、この場の話しを聞き取つて、合力してくれろとは、見すく知れた

仁太 騙りだと云はつしやるのか。

十右 サア。

仁太 騙りなら騙りにして、褒美をくれずば爲になるまい。今に吠え面をかくなよ。

運太 吐かし居るか。おのれ、なんで此方、吠え面をかくのぢや。

仁太 さればサ、お大名が供をも連れず、遊所歸りの途中から、出走りしても事が濟むか。

運太 ヤア。

ト恟り。

仁太 サア親仁、なんだ、切らないか。おらア強請りだ。騙りだ。存分に見ないか。朴念仁め。  
運太 エ、おのれ、武士に向つて

ト立ちかゝるな

團右 ア、コレ、運太夫どの、彼れを殺め、この事世間へ流布いたさば一大事。まづ鎮まられよ。  
運太 ムウ。

ト思ひ入れあつて鎮まる。

仁太 サア親仁、突かないか、切らないか。此奴は竹光でも差してゐるさうだ。よいく。これからは



おれが又、千葉の殿が出奔したを見届けましたゆゑ、強請りに参つた、私しは強請りでござりま  
すと、代官所へ駆け込んでくれべい。

ト身ごしらへして行きかけるを

團右ア、コレ、それを云はれては一大事。

運太それく、この運太夫が無調法なら、幾重にも詫びる程に

仁太イ、ヤ否だ。おぬし達に彼れこれ云はれるより、我れと我が強請りを打割つて、科人になりたく  
なつた。恐れながらとくらはすべい。

トまた行かうとするを

十右イヤ、待ちやれ。

仁太なんぞ用でもあるか。

十右成る程、きついものだ。生とし生けるもの、命惜しまぬものは無いに、事を好んで科人とは、ハ  
テ大束な。菜賣りには惜しい魂ひ。

仁太呼ぶから何ぞ用かと思やア、こなさん、おれをてうらかすか。

十右なにサ、その大丈夫な魂ひを、なんと賣つてはくれまいか。

仁太ムウ。すりや、おれが願つて出ようといふ魂ひを

十右横に寐かして内分に。

仁太ムウ。それも値との相談で

十右賣る氣ならば

仁太いくらに買ふ氣だ。

十右カウト、まづいくらであらうぞ。

仁太コレ、おれは木性で、魂ひは九ツあるよ。

十右サア、いくつあらうと、まづ災ひも三兩かえ。

ト紙入れより金を三兩出す。

仁太ハ、ハ、ハ、ハ。間男でさへ七兩二分。根ぎり小ぎりを云はずと

十右ムウ。そんなら堪忍五兩がギリく。

仁太もう金は無いか。

十右ハテ、表を張つても道樂商賣、さう遊び金があるものか。これでも飲んで  
仁太歸れなれば、ドレ代官所へ

トまた行きにかゝるを

十右 待て。して、いくらなら濟ます氣だ。

仁太 どうで其方も百年目、百兩ならば料簡しよう。

十右 でも百兩といふ大金が

仁太 一萬丁の知行と鈞替へ。

團右 十右衛門、扱ひ出来ぬか。

十右 サ、その儀は。

仁太 サアくく、見掛け倒しな、しみつたれめが。

十右 ムウ。

ト思ひ入れ。此うちおりく、奥より財布を持ち、出かゝりゐて

りく こちの人、委細は奥で聞きました。お屋敷の大事といひ、扱ひかゝつて濟まぬも恥。この金をや

らしやんせいな。

十右 この金は。

りく サア、大事な金ぢやと、お前が仕舞うておかしやんした

十右 箆笥の金なら、こりやどうも

りく あんな者に、しみたれの何のと、腹が立つわいなアく。

十右 成る程、難儀になれば、この身一つを

ト財布より小判を出して數へ

ソレ、望みの通り百兩

トそこへ置く。

仁太 ムウ。廉いものだが濟ましてやらう。

ト取上げる、その手を取つて

十右 イヤ、この金はまだやられぬ。

仁太 ヤ。

十右 サ、まこと殿を介抱したか、しかと證據の無いおぬし。

仁太 イヤ、そりやアきつとした印しがある。コレ

ト吠其入れより前幕の鑑定書を出し

その時、殿様が持つてゐたこの書き物。

團右 ムウ。そりや袖香爐の鑑定書。

運太 香爐も御所持であつた筈ぢやが。

仁太 その香爐とやらもある。

トそこにある筒茶碗を、鑑定書の袱紗へちよつと包み

コレ、爰に持つてゐるが、殺したといふ慥かな證據。

十右 ムウ……それ聞いたら、もうその金は

仁太 どうしたと。

十右 やるには及ばぬ。

ト引ッたくる。

仁太 イヤ、手に取つた金どこまでも

ト又取らうと引ッ張り合ふ拍子に、右の金を二階の障子の中へ打込み

南無三、二階へ

ト皆々を突きつけ、ツカ〜と二階へ上つて、障子を明ける。内よりボンと投げ落され

ヤ、慥かには

ト見上げる。

十右 千葉の殿様。

ト二階の内にて

甚三 甚三郎は、疾くよりこれに。

三人 なんと。

甚三 疑念の輩、對面なして安堵させん。

ト合ひ方になり、障子引抜き、内に甚三郎、眺らへの形にて其のみゐる。

運太 イヤナウ、御遊所先よりお行くへが知れざるゆゑ、如何なさんと存ぜしに、夢なら覺めな拙者が

喜び。どういふ仔細でこの所に。

甚三 サア、某若氣の誤まりとはいひながら、身持ち放埒、家國をかへりみぬ御先祖の御罰目前に、こ

の程遊所で服せし薄茶へ、何者が仕込みしが、正しく俗に痺れ藥、毒氣の廻る折も折、それなる

匹夫に騙かられ、道も驢の桐ヶ谷。いまだ氏神捨てさせ給はぬしにや

十右 折よく行きあふ御恩の殿様。

甚三 一方ならぬ介抱に、毒氣も忽ち

十右 消えてお命恙なく、お心は附いたれど

甚三 世間を憚り、彼れと同道。

十右 夫婦の外は人に知らさず

りくあの二階に忍ばせましたも

十右 御所持の香爐知れざるゆゑ。

甚三 さは知らずして、家断絶といふにつけこみ、ためし稀れなる不届きの……此ほど思はず引裂きし

鑑定書のこの破れ。

ト懐中より茶屋場の破れを出し

よく似せたれど墨色時代、相違の似せ物。誠の鑑定を持参なしたは、此方の却つて幸ひ……サア

匹夫、今一應強請つて見ぬか。

仁太 サそれは。

甚三 サア……斯様な輩は、家にかへても糺明なすが、世上の助け。召連れる。そこ動くな。

ト突き放す。

仁太 ムウ。こりやモウ

ト逃げようとする。十右衛門突き廻して門口をシャンと締め

十右 イヤ、貧乏ゆるぎもさしやアしないぞ。

仁太 ムウ。氣遣ひするな。斯うなりやア野へ出した死人。ドリヤ、末期の貰、一服やるべい。

ト下の方にて貰吸ひつける。皆々呆れる。

甚三 一度死して又この土へ、生れ變つた甚三郎、今まで惰弱な魂ひも、改めずんばあるべからず。その手初めに團右衛門、それへ出い。

團右 ハッ。御用でござりまするか。

ト氣味悪さうににじり出る。

甚三 外でもない、紛失の朱印は、其方盗み取つたであらうが。

團右 ア、モシ、どう致して拙者めが

甚三 申すな。隠すより顯はるゝはなし。某死去と聞くよりも、家相續を望むといひ、人に知らさぬ紛

失を、其方一人知つたは曲事。

團右 サそれは。

甚三 なんと。